

---

# お菓子な男の娘と星降る町

トマト畑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お菓子な男の娘と星降る町

### 【Nコード】

N7447Y

### 【作者名】

トマト畑

### 【あらすじ】

お菓子作りが大好きな男の娘、橘悠華たちばなゆうかとはある時神を名乗る少女に出会う。

その少女に気に入られた悠華は別世界へと送られる。

天使を名乗るロザリオとニャーと鳴く車をお供にして。

悠華が送られた世界は天使がいて魔族がいて人間がいて魔王がいる世界。

ただ悠華はただお菓子を作るだけ好きなお菓子を作るただそれだけであった。

## お菓子な男の娘とオリキャラ紹介（前書き）

初めましてトマト畑です。この小説はティンクルくるせいだーすの二次小説です。こういうのが気に入らない人はすぐにお戻りをお願いします。

とりあえずまずは主人公とオリキャラ紹介です。

## お菓子な男の娘とオリキャラ紹介

橋 悠華 (たちばな ゆうか)

性別 男の娘

妄想CV 堀江由衣

・見た目

髪の毛は水色。

長さは肩にかかる程度。

瞳は緑。

身長 164cm

本作の主人公。最年少の天才パティシエである事以外は普通の男の娘であったが究極神ザ・ゼウスを名乗る少女によってティンクルくるせいだーすの世界に飛ばされてしまう。

(悠華はティンクルくるせいだーすの事を知らない。)

そこで何も知らないまま自由に行動していく。お菓子作りが趣味でゼウスにもらった意思を持つ車『凜々』で洋菓子、主にクレープやケーキなどを移動販売している(軽食等も販売している)。

自らが作ったお菓子に名前を付けて話しかけたりする位にお菓子を愛している。それを見てよく引かれたりもする。

見た目が女の子より女の子な為に性別を間違えられる事も度々あるようだ。悠華がつくる洋菓子にはあのナナカも90点台をつける程の美味しさである。

和菓子も作る事もできるが移動販売には向かない為に殆ど作らないが一部の熱心なお客の為にたまに作っている。これもまた絶品との

事。

困っている人（魔族も天使も含む）を見捨てる事ができずによく助けてしまう。その為にいるんなフラグを建てて、様々な好意を向けられるが鈍感な為にあまり気づいていない様子。

流星くるせいだーすのメンバーとよく似たロザリオを使い闘う事が出来る。

ロザリオはゼウスにより渡された。

そしてそのロザリオにはゼウスの部下であるミカエルの魂が宿っていて悠華に力を貸してくれる。

属性は光。

ロザリオを使つての変身後はスタードライバー 輝きのタクトの主人公であるタクトがアプリポワゼしたときになる銀河美少年の姿。

（ちなみにこれはミカエルの趣味だそうだ。）

使用武器

・エクスカリバーデユナミスト

（見た目は某ライオンの騎士王様のエクスカリバーの色違いの白色柄の部分にミカエルのロザリオを嵌め込む場所がある。）

・ライトシューター （見た目はただの白い装飾銃だが魔力を込める事によって相手を追尾する魔力弾を撃つ事が可能。他人の魔力を込めて撃つ事も可能。）

EXスキル1 バディズシュート（信頼を得た仲間の魔力もしくは霊力をライトシューターに込めて対象に攻撃をする。1〜5回までの攻撃が可能。ただし仲間がいない時は自らの魔力を籠めるしかない。）

EXスキル2 シャイニングバースト（悠華の最大の霊力及び魔力を籠めて放つ必殺技。）

ミカエル

妄想C V 藤原啓治

悠華の頼れる相棒であり究極神のザ・ゼウスの部下。本来の姿は不明である。ゼウスより悠華に渡されたロザリオに宿っている天使。天使とは思えない様な言動で度々悠華を困惑させる。

自称悠華の父親。

何だかんだいいながらも悠華の事を心配しているようである。ゼウスにセクハラをしたためにロザリオに魂を封印されたとの事。

凜々(りんりん)

妄想C V 竹達彩奈

ザ・ゼウスより悠華への送られた意思を持つ車。燃料等は必要はなく悠華が望む限り走り続ける。

見た目は大型の白いキャンピングカーに漢字で凜々と書かれている。中には簡易的なシャワー、ベッド等の設備がある。キッチンもある。ニヤーと鳴く。そして悠華になついている。

悠華は凜々で洋菓子の移動販売店『凜々』を経営している。

神位第1位 究極神ザ・ゼウス

妄想C V 新名彩乃

見た目は11eyesのリーゼロッテ・ヴェルクマイスター  
悠華をティンクルくるせいだーすの世界に送った張本人で同性愛者。  
悠華のお菓子に対する愛情を気にいった為に様々な能力を与えた。  
見た目と言動から分かりづらいが実は純粋な少女で破廉恥な話等が  
苦手である。下手をすると吐血する場合もある。  
その力には誰もかなわない程強大だそうだ（ミカエル談）。  
彼女も悠華の事を心配して度々ミカエルが宿っているロザリオを通  
して連絡を取っている。

お菓子な男の娘とオリキャラ紹介（後書き）

とりあえずこんな感じですよ。一応追加変更予定もあります。何か意見があったらよろしくお願いします。

## お菓子な男の娘とプロローグ（前書き）

それにしてもなぜティンクル くるせいだーすの二次小説がないの  
だろうか？自分が見つけきれていないだけなのだろうか？  
とりあえずのプロローグ。駄文ですのでご勘弁を。

## お菓子な男の娘とプロローグ

悠華 side

お菓子は良い。何が良かったって？そんなのは簡単な話、人を笑顔にする事が出来るから。

ボクはそんなお菓子を作るのが大好きだ。

小さい頃から父親や母親の影響でよくお菓子を作っていた。父親は洋菓子職人、母親は和菓子職人であった。その為でありとあらゆる事を教えられた。最初の内はよく分からないままに作っていた。

だけど出来たお菓子を食べて喜んでくれた人達の顔を見る事がボクは嬉しかった。だからボクはお菓子を作り続けた。その内いろんな賞を取っていたり、最年少の天才パティシエ等と言われたりもした。だけどそんな事は関係ない作りたいからボクは作る。ただそれだけである。

そんなある日ボクはとあるお菓子の注文を受けた。注文者は不明でただ届ける場所、時間と新作のケーキを10個とだけ書かれていた。父親や母親はきっとイタズラだろうと言っていたがボクはイタズラであろうとなんであろうと関係なくケーキを作った。ケーキを作れば注文した人が笑顔になるならばと考えた。

そしてボクは父親と母親には内緒でケーキを作り指定された場所に持って行った。

指定された場所は少し古びた公園で時刻は夜の7時。

「やっぱりイタズラだったのかな？」

辺りを見渡してみても誰も見あたらない。あるのは無人の遊具のみ。

「あまり遅くなるとお父さんに怒られそうだけどこのケーキを食べ

たいと思っっている人もいるだろし。よしやっぱり少し待ってみよう。」

ボクはもう少し待ってみる事にした。少し恐い感じもしたけどボクのケーキを食べて喜んでくれる人がいるならと思いいボクは近くにあったブランコに座った。

……一時間経過

「もう少しだけ待ってみよう。」

……二時間経過

「きつと来てくれる筈。」

……三時間経過

「やっぱりイタズラだったのかなあ？」

現在の時刻午後22時。さすがにイタズラではないかとボクも思い初めていた。もう辺りは真っ暗であった。それと先ほどより携帯電話に父からの電話が何件も入ってきていた。全て無視していたけれど。

「これ以上は流石に不味いよね。下手したらお父さんに、いや確実に怒られるよね。はあごめんねみんな、ちゃんと美味しく食べてあげるからね。」

ボクは膝に抱き抱える様にして持っていたケーキ達に謝罪をしてい

た。ボクはよく自らが作ったお菓子達に話しかけたりする。よく他の人達には可笑しいって笑われたりする。お父さんにはやめなさいって言われたりもするんだけどケーキは自分の子供だなんて考えていたりもするわけでありまして。やっぱり美味しく食べてもらいたくて。

「帰ろうつと。」

ボクは帰ろうと思えばランコより立ち上がり家への帰路へとつこうとしていた。そんな時であった。

「貴方のお菓子に対する愛情気に入ったわ。」

「お、お化……………女の子？」

一人の女の子が黒いドレスを着たまるでお人形さんのような少女がボクの前に立っていた。

もしかしてこの娘が……………。

「私は「この子達を食べてくれる人ですか!？」え、ええそうなるわね。」

「よかったねみんなー!!」

あまりの嬉しさにケーキ達が入っている箱を抱きしめる。無論潰れない様に優しくふんわりと。

「ふふふつ、本当に可愛い子ね。これで女の子だったらどれほど良かった事かしら。」

何やら少女が呟いていたがボクは気にする事はなくケーキ達が入っ

ている箱を少女に突きだす。

「美味しく食べてくださいね。」

「男の娘でもかまわないわ。もうこの子食べちゃおうかしら？」

少女は何かを必死に考えるかの様に額に皺を寄せながらも箱を受け取ってくれる。

「一応生クリームを使っているケーキもあるからドライアイスを入れてありますので気をつけてくださいね。」

三時間も経ったからもうドライアイスが二酸化炭素に戻っているかもしれないけどね。

「あの娘が言うだけあって人間の食べ物の割には美味しそうね。この緑色のやつが乗っかっているのは何かしら？」

少女は箱を開けてまるで珍獣見るかの如く箱の中に入っているケーキを見つめていた。

「それはメロンケーキのメロンちゃん。生地と生クリームにメロンをたっぷり入れてあるんだ。」

「メロンねえ。まあいいわ頂くわ。」

ケーキを取り出して豪快に正面からかぶり付く少女。さよならメロンちゃん。

それにしても今時珍しい娘だなあ。フォークもスプーンも使わないでかぶり付くなんて。

「美味しい、何よこれ美味しいじゃない！これは何よ？この赤いのが乗ってるのは！？」

メロンケーキをあつという間に食べてしまった少女は直ぐに別のケーキを取り出す。

「それはミックスベリーケーキのミーちゃん。苺にラズベリー、ブルーベリーをふんだんに乗っけてみました。」

「甘いけど酸っぱい。甘酸っぱいのね！！恋の味のケーキね！！」

やはり豪快にかぶり付く少女。さよならミーちゃん。

それから合計五つものケーキを頬張った少女。

「そんなに食べて大丈夫？晩御飯は流石にこの時間だから食べ終えたとは思っけど。」

「問題ないわ。私には人間の様に空腹や満腹なんてないのだから。」

「よく分からないけど……………あっ！？」

「ん？何よ？」

ボクは少女の頬についたクリームを発見する。

「動かないでね。……………はいとれたよ。ペロツ。」

少女の頬についたクリームを指で掬いボクはそのまま口に運び舐める。結構クリームも滑らかに出来ているんじゃないかな？

そう思ったボクは少女に感想を聞こうとする。だけど少女の様子が可笑しい事に気づく。顔を赤くして下を向きプルプルと震えていた。

「ど、どうかした？」

「ほ……………」

「ほ？」

最初にほが付く言葉って何があったっけ？

「惚れてまっやるっがー！！」

「え？何何なの！？」

少女は突然叫び声をあげる。いや大声をあげるの間違いだろうか？

「貴方何なの！？私の萌えキュンポイントをそんなに連打して！？私を萌え殺す気なのかしら！？」

「え、ええと？」

な、何か気に触る事をしたのだろうか？

「決めたわ、貴方この私の究極神ザ・ゼウスの権限によって別世界に送るわ！！！」

もしかしてこの娘は……………。

「病院まで送って行くのか？ほら病院の人達も心配している筈だよ？」

「私は精神異常者ではないわ！」

みんなそういうんだよね。

「大丈夫ボクも一緒に謝るからね？」

「おのれー！！ならこれでどうかしら！？」

少女は顔を真っ赤にして指をパチンと鳴らす。そしてその瞬間であった。世界が真っ赤に染まった。ボクの周りにあった物が全て消え去り残ったのはボクと目の前の少女だけだった。

「どうかしらこれで信じてくれるわね？」

「まさか……………！？」

「そうそのまさ」「これは夢？」「どうやっても私の事を信じないつもりみたいね！？」

ボクは辺りを見渡して見るけれど何も無い。

あるのは真っ赤に染まった空間だけ。

試しに自らの頬をつねってみるけど。

「いひゃい。ならこれは夢じゃないのかな？」

「だから先ほどからそう言っているでしょう！？橘悠華。」

「どうしてボクの名前を？」

教えてなかった筈だけど？

「驚く事はないわ私は究極神ザ・ゼウス。知らない事は何も無いわ。橋悠華。最年少で数多くの賞を受賞し、最年少の天才パティシエと呼ばれている。このあいだ和菓子コンクールで優勝してなかったかしら？まあその和菓子は貴方が作って貴女の母親の名前で出したのよね？」

事実である。母親に何でもいいからと新作の和菓子を作ってくれと言われて作ったのだけれど気づいたらそれがコンクールに出されていた。別に気にはしなかったけどね。

でもそれを知っているのは父親と母親だけだった筈なんだけど。もしかしてこの娘は本当に？

「信じてくれたところで今から貴方を別世界に送るわ。送る世界は貴方がお菓子を楽しくそして自由に誰にも気にする事はなく作れる世界が良いわね。」

「あの、別世界って一体？それに送るとか何とかって？」

「悪いけど今話しかけないで。どの世界がいいかしら？あの娘に聞くのは癪にさわるのよね。……よし決めた！！」

しばらく頭を捻りまくっていた自称神様は納得がいったのか元気良く声をあげる。何が決まったのだろうか？

「貴方を送る世界はティンクルくるせいだーすの世界よ！！」

「くるくるぱー？」

「違うわティンクルくるせいだーすよ！！貴方知らないの！？結構

有名なゲームよ!！」

「ごめんなさいゲームは親にさせてもらえなかったから。」

興味はあつたんだけどそんな事をする時間があるならお菓子を作りなさいとお父さんとお母さんに言われてたから。まあボクもお菓子作りとゲームを比べると断然お菓子作りの方に軍配は上がったんだけどね。

「そう、知識がないのね。でもそれもまた一興ね。今から貴方を別世界のティンクルくるせいだーすの世界に送るわ。まあどういう世界かは説明しないでおくわ。でも敢えて言うなら貴方が誰にも何も言われる事もなくお菓子を作れる世界と言っておこうかしら。」

「……………誰にも何も言われなくてお菓子が作れる世界。もし本当にそんな世界があるのなら。それならボクは……………」

お父さんやお母さんに言われたお菓子を作らなくてもいいんだ。無理矢理コンクールやテレビに出される事もなく、好きでもない事をしなくてもいいんだ。ボクはその別世界に既に魅了されていた。

「ふふふ、交渉成立ね。ならまずは能力の付与かしら? 変なのに絡まれたらめんどくさいしね。そうね身体能力はあの世界なら七大魔將のバイラスより少し上くらいがちょうどいいわね。」

バイラスってなんだろう? 人の名前だろうか?

「魔力は二べの魔女より少し上。普段は隠蔽状態は当たり前ね。」

なんだか勝手に話が進んで行くんだけど大丈夫かなあ？

「うーん、くるせいだーすなら変身がお約束よね。………そういえばこの間私にセクハラしようとしたミカエルの魂をロザリオに封印したっけ。」

ゼウスさんは指を再びパチンと鳴らす。するとゼウスさんの手の中には銀色のロザリオが現れる。中央に金色の宝石が嵌めてある。綺麗だなあ。

『ああなんでえゼウスか。何のようだ？俺が恋しくなっちまったか？ヒヤハハハハハハハ。』

突然どこからか声が聞こえる。結構歳を取っている感じの男の人の声だ。けどど辺りにはボクと嫌そうな顔をしながらロザリオを見つめるゼウスさんしかいない。

「そんなわけないでしょうが。貴方に頼みがあるのよそこで事態が理解出来ずにボケツと突っ立っている可愛らしい子に力を貸してあげてほしいのよ。」

『ほう、なかなかの上玉じゃないか。後10年もすればいい女になるぜえありゃ。』

ゼウスさんが右手に持っていたロザリオをボクの方に向けける。気のせいかロザリオの中央に嵌めてある金色の宝石が光る。さらには風も吹いていないのに勝手にゆらゆらと動いた様な？

「残念だけこの子は男の娘よ。」

『ああそういうことかい。道理でてめえが食ってねえわけだ!』

「砕くわよミカエル。」

『わりいわりい。てめえみたいな純情小娘がそんな事できるわけなかったな。しようとしても興奮して血を吐いて終わりだな。ヒヤハハハハ。』

「人の神経を逆撫でする天才ね貴方は。まあいいわ私は寛大なる究極神ザ・ゼウスそんな事では怒らないわ。………悠華受け取りなさい。」

もしかしてロザリオが喋っているのだろうか？

そんな事を考えているとゼウスさんはロザリオを唐突にボクに投げ渡す。

「うわつと。」

『ナイスキャッチだ坊主。』

「やっぱりロザリオが喋っている。」

『あんまり驚かねえんだな。』

「だって神様と出会った後だから。」

『ちげえねえな。それで坊主の名前は?』

「悠華、橘悠華。よろしくね。」

『悠華かいいい名前じゃねえか。俺の名前はミカエル。大天使ミカエルだ。気軽にパパ、もしくはダディと呼んでくれや。』

「ええと？」

ボクはミカエルの言動に戸惑いつつゼウスを見る。

「無視して構わないわ。そいつはただのセクハラ爺よ。」

『何でえ、尻のひとつや二つ触ったくらいで。こんなのに人の魂を封印しやがって。』

「ミカエルそんな事したんだ。」

『何言つてやがる悠華。男なら一に色事、二に色事、三四も色事、五も色事だろうが!?!?』

「そうなの?」

「その馬鹿の言う事は半分は聞き流しなさい。とりあえずそんなのでも大天使の力を持っているから何かの役には立つと思うわ。くるせいだーすの世界に送った後はそいつに色々聞くといいわ。それと最後に凛々来なさい。」

ゼウスさんは手をパンパンと二度くらい叩く。すると車のエンジン音らしきものがこちらに近づいてくる。

『随分と気前が良いじゃねえか凛々をつけるなんてよ。』

「それほど悠華を気に入っただけの事よ。」

「ねえ凜々って何?.....って何か来たー!?!?」

謎のエンジン音と凜々という名前に疑問を持ちボクは質問しようとする。けれどこちらに向かつてもの凄い勢いでこちらに向かつてくる車に気を取られてしまう。

『悠華何も聞かずに五歩後ろに下がれ。』

「あ、うん。」

ボクは言われた通りに後ろに下がる。

《ニヤー!》

「あの子は凜々。意思を持つ車でぶおらっー!?!?」

あ、ゼウスさん凜々に轢かれた。

『最高だなあ凜々!?!?!』

《ニヤー。》

「結構吹き飛ばされたけど大丈夫かなゼウスさん?」

『あれでも一応神だ大丈夫だろ。それより早く凜々に乗り込みな悠華。』

「神様凄いね!?!」

あんな勢いの車にぶつかられて大丈夫だなんてさすが神様。 そんな

な事を思いつつ白いキャンピングカーの凛々に乗り込む。

「凄く広い。」

中に入ってみるとボクはその広さに驚きました。最初に目についたのは簡易的なキッチン。オーブン等も完備されている。これならケークやクッキーなんかも作れる。

『広いだけじゃねえぞ。何と100万馬力だ!!』

「よく分からないんだけど。」

『要はすげえ車なんだよ。』

何となく分かってしまう自分がいました。気を取り直して……………。

「それでどうやって別世界に行くの?」

『それなら簡単だ。凛々エンジン全開だ!!』

《ニヤァー!!》

その瞬間身体に圧倒的なGがかかる。立っているのが辛いくらいの。ボクは車の中に座り込む。

「うううう、気持ち悪くなりそう。」

『このまま一気に飛ばして別世界にいくぜ!!』

どこのバツ トウザフーチャー?

「悠華！ミカエルの魂が宿っているロザリオを通せば私と話せるから何かあったら連絡しなさい！！困ったらゼウスお姉ちゃんに連絡よー！！！」

轢かれた筈のゼウスさんが凄い勢いで走っている筈の凜々と並走して走ってくる。ゼウスさん足早いなあ。

何とか壁に掴まりながらも立ち上がりゼウスさんに手を振る。

「それとケーキ美味しかったわよ。ありがとっつてぶへらっ！？」

あ、転けた。

『アヒヤヒヤヒヤヒヤ！！まさかあの百合百合究極神ゼウスが人しかも男に礼を言うなんてな。お前何をしやがったんだ？』

「ただケーキをあげただけだよ。」

『ケーキねえそれはうまいのか？』

「うん。とつても美味しいよ。ケーキの他にもいるんなお菓子があってね。最近は飴細工を利用したお菓子を作ったりしているんだけどね……………」

ボクは新しい世界で何が起こるのかどんなお菓子を作るのか楽しみでしかたなかった。

（もうお父さんやお母さんに無理矢理お菓子を作らされる事もなく自分で好きな様に好きなお菓子を作れるんだよね。

ボクのお菓子は新しい世界で誰かを笑顔にできるといいな。)

ザ・ゼウス side

「行つたわね。あの子のお菓子なら魔族も天使も人間も魔王だって笑顔にできるわ。だってこの私究極神ザ・ゼウスを笑顔にしたのだから。」

今まで私はこれほど心の底からプラスの感情を感じた事はないかもしれないわね。

「帰つて他の神に自慢でもしようかしら?.....そういえばあの子からもらつたケーキは何処に行つたのかしら?」

そういえば見あたらないのよね。最後にあつたのは凛々に轢かれる.....ところ...までは。

「ま、まさか!?!」

私は辺りを見渡して見る。するとケーキは意外と簡単に見つかった。箱に入った状態で素晴らしい位に潰れていたのだけれど。そして私はそれを力なく拾う。中を開けて見るけれど中身は箱と同様に潰れていた。

「さ、最悪じゃない。こうなれば月に一回、ううん週に一回位はケーキを届けさせようかしら？」

意外とあの子とは長い付き合いになりそうね。

私は潰れたケーキをじっと見つめながらその様な事を考えていたわ。

## お菓子な男の娘とプロローグ（後書き）

現在の悠華のアシストキャラ

神位第1位 究極神ザ・ゼウス

ミカエル（ロザリオ）  
凜々（車）

ここで補足説明。ゼウスやミカエルはクルくるの世界の天使等とは関係はないです。ゼウス達は全世界の神、天使。クルくるの天使達はあくまでクルくるの中でのみの天使という事でお願ひします。正直自分も何言っているんでしょいかとも思います。何かご質問等があったらご気軽に聞いてくださいね。

**お菓子な男の娘と初めての友達（前書き）**

とりあえずまだ原作キャラは出ないです。出すのは次回からの予定  
です。

今回はまあ題名通りです。

## お菓子な男の娘と初めての友達

悠華 side

あれから凜々に乗って走り続けていたんだけどどうやら気を失っていたようで気がついたら辺りは夜で現在地はどうやら高台の丘のようだ。その証拠に見たことのない街並みが見下ろせた。どうやら本当に別世界に来たようである。

「それにしても星が綺麗だなあ。」

ボクは凜々の窓を空けて身体を乗り出して空を見上げる。

「あ、流れ星だ！お願いしなくちゃ、ってもう流れちゃったよ。」  
残念。もう一回流れないかな？

ボクは期待をしながら星空をじっと見つめる。

《ニヤー。》

突然凜々が鳴き声をあげる。

「どっしたの凜々？」

『反対側の窓から空をってみろだよ。』

いつの間にか首にかかっていたミカエル（ロザリオ）がゆらゆらと揺れながら凜々の言葉を翻訳してくれる。

「ミカエルいつの間になんかそこら？」

『お前が寝てる間にな。まあ細かい事は気にするな。それより早く反対側の窓を開けてみな。』

「うん、わかった。」

言われた通りにボクは反対側の窓に近寄って窓を開ける。因みに引き戸。

そして外の光景に目を奪われた。

「凄い流れ星がいっぱい。これって流星群？」

窓の外の夜空にはたくさん流れ星が流れていた。本当に綺麗。

星を題材にしたケーキを作るのもいいかもしれない。金平糖を使ってみるかな？星形のクッキーは少し地味だろうか？マイナー感が漂う気もする。星形にくり貫いたゼリーにアイスを……。

などとボクが星を題材にしたお菓子を考えている時だった。

『ゼウスの野郎よりもよってリ・クリエの時にこの世界に送りやがるとは面倒な事をしてくれるじゃないの。』

何やら不機嫌そうにロザリオ中央の宝石を点滅させて呟くミカエル。(どつやらミカエルが喋る時はロザリオの中央に付いている宝石が点滅するようである。)

《ニャー。》

凜々も同意するかのように鳴き声をあげる。

「ねえミカエル、リ・クリエって何？」

『なんだゼウスの奴そんな重要な事も言っていないのか。まあいいリ・クリエって言うのはなあこの世界の中心である今俺達がいる町、流星町に流星が多くふる時期のことを言っつてな。期間は約半年から数年間程だった筈だ。リ・クリエは世界に何らかの災いをもたらすとされている、魔族が人間界に来ること以外、詳しい事はよくわかっていねえ。まあゼウス辺りの神ならなんか知ってるんだろうがな。これは事実どうかは知らねえが初めてリ・クリエが起きた時はこの世界を破壊するほどの威力だったそうだぞ。』

「よくわからないんだけど。」

『簡単に言えばリ・クリエはめんどくさい、関わりと録な事がない。でも思っつていれればいいんだよ。それにお前はお菓子を作る為にここに来たんだろ。闘いにきたわけじゃねえだろ?』

「それもそうだね。ああ早くお菓子が作りたいな。でもその前にキッチンも把握しなくちゃいけないし、凜々の中もいろいろ見みたいしなあ。」

《じゃあ。》

「どっかしたの凜々?」

『優しくしてね、だよ。』

「……………ん?」

《ニヤァ。》

『ほー。なんだ悠華に惚れたのか?』

「な、なんの話し?」

『いやなに凛々は悠華になら全部見せてもいいんだとよ。あんなところやこんなところまで。』

「状況が見えないんだけど。」

『簡単な話し凛々は悠華に一目惚れしたそうだ。ちなみに凛々はメスだ。』

《ニヤー!》

『ああ、はいはい。メスじゃなくて女の子だそうだ。』

「とりあえずお友達からよろしくね凛々。まずはお互いを知る事から始めよう。」

『おいおい。別に車相手にそこまで丁寧に言わなくてもいいんじゃないねえのか?』

「凛々だつて心をもった女の子なんだから凛々個人として扱わないと駄目だよミカエル。」

《ニヤー。》

『惚れ直した、悠華の為なら何でもしてくれるそうだ。』

「ありがとっね凜々。」

『たくつ、ほらいつまでも窓を開けてないでさっさと閉める寒く  
しかたねえ。』

「うん、りょうかい。……………あれ？」

ロザリオなのに寒さを感じるのだろうか？

そんな事を思いつつゼウスに言われて窓を閉めようとしたその時だ  
った。夜空に可笑しな光景を目にする。

『なんだどうした？なんかあんのか？』

《ニヤ？》

「いや、流れ星が。」

『ああ？流れ星ならたくさん降ってるだろうが。』

《ニヤ。》

「そうなんだけど……………何か物凄い勢いで近づいてくるんだよね、  
流れ星が。」

『なに！？』

《ニヤ？》

二人が驚くのも分かるんだけどボクが一番驚いているんだよね。白  
い流れ星がこちらに向けて流れていや、もう突っ込んできてないか  
な？

「ブギボー！？」

「ん？ミカエル何か言った？」

『いや何も言っていないが。』

《ニヤー。》

『凜々も何も言っていないだよ。気のせいじゃねえのか？』  
「今何か確実に聞こえたんだけど。……………ってうわ!？」

何かの叫び声らしきものに気を取られたボクは眼前まで近付いていた流れ星に気付く事が出来ずに頭に流れ星が衝突する。

「ってあんまり痛くない。」

「ブギ。」

「ぶぎ？ってなんか頭の上にいるんだけど!」

頭の上の重みを感じてそれに手をのばす。

「おお、なんか柔らかくて真ん丸だ。」

「ブキウギ。」

「そして頭の上になんかいてブキウギ言ってるんだけどミカエルボクの頭の上がいるのかな？まさかお星さまなわけないよね？」

ボクはミカエルのロザリオを外して頭の上の光景を見せる。

『こいつはやべえ、悠華すまねえな俺が不甲斐ないばかりにこんな目にあわせちまって。俺って奴はいつもこう遅いんだよ!』

《ニヤ、ニヤー!!!》

「え？何なのボクの頭の上のどうなってるの!？」

『悠華お前の事は忘れねえ。』

「そんなに危険な状態なのボクの頭の上!？」

《ニヤ、ニヤー!!!》

頭の上を見たミカエルの反応と凜々の鳴き声にボクは不安を隠せず  
に頭の上に乗っかっていた真ん丸さんをゆっくりと掴み目の前まで  
降ろす。

「ブキ？」

「……………可愛い。」

ボクの頭の上に乗っかっていたのはサッカーボールより一回り小さい  
位の大きさの黒くて丸い生き物だった。

『アツヒヤヒヤヒヤヒヤ！最高だぜ悠華今のお前の顔ってあだ  
!?!』

とりあえずミカエルはそこらへんに投げた。

「ところで君は？」

「ブキウギー。」

「ブキウギっていう名前なの？」

「ブキツウギッ。」

「仕方ないからミカエル訳して。」

『何も投げるこたあねえだろうが。少しからかったただけだろうが。』

ミカエルがロザリオに魂を封印された理由がわかった気がする。ミカエルを拾おうとした時『くー。』っと可愛らしいお腹の音が聞こえる。どうやらブギウギからみたいである。

「ブギー。」

「ん？お腹が空いたの？」

「ブギー。」

こくりと身体を傾かせるブギウギ。

「何か食べれる物作るから少し待っててね。」

「ブギ。」

「ってそこに行くんだ。」

再びボクの頭の上に乗っかるブギウギ。どうやらボクの頭が気に入ったみたいだ。

『んなことより早く俺を拾えよ！』

「そこでしばらく反省しなさい。」

『まじかよ。』

《ニヤニヤ。》

『ざまあみろだと！？凜々てめえ言わせておけば。……それにしても床つめてえ。』

とりあえずミカエルは無視して何かないかなあ？ボクはキッチンの戸棚等を調べてみる。

「小麦粉に塩に砂糖。いろいろあるけど手早く作るならこれかなホツトケーキミックス。」

ボクが取り出したるはみんなの友達ホツトケーキミックス。その名の通りにホツトケーキを作るのにも作れるんだけど他にも色んなお菓子も作れるんだよね。

「今回はホツトケーキを作ろうかな。エプロンは……あつたあつた。」

本当に凜々の中には何でもあるんだね。ちなみにエプロンは青色のエプロンに漢字で凜々つてかいてあつた。それでは始めよう。まずは卵をボールの中に割っていれまして牛乳と混ぜるそしてそこにホツトケーキミックスを加えて手早く混ぜる。

その間にフライパンを中火で温めて、生地が準備できたらそれを高い位置から流し入れると。そのまま弱火で焼いて、表面が少し乾いてポツポツと穴が空いたら裏返してつと。

「ここがボクは好きなんだよね。よつと！」

フライ返しでホットケーキをひっくり返す。これが綺麗にできると嬉しいんだよね。

『ほー、うまいもんだな。』

《ニヤ。》

「ブギウギ。」

「ホットケーキはよく朝ごはんに食べていたからね。初めて作ったのもホットケーキだったんだ。」

なんだか懐かしいな。

きつね色になるまで焼いたら出来上がり。

「後はハチミツをかけてバターをのつけたら出来上がり。10枚位焼けばいいかな？」

作っていたら自分も食べなくなるのはしかたないよね。

「ブギブギ!!」

『美味そう。早く食べさせろだよ。』

頭の上でピョンピョン跳ねるブギウギ。気にいってくれるといいんだけどね。

どうやら食器やナイフやフォークも完備されているようである。これもゼウスさんが準備してくれたのであるだろうか？

大皿に乗せたホットケーキをキッチンに備え付けられていた白いテーブルに置く。

「ブギボー!!」

「慌てないでねブギウギ今飲み物を出すから。何かないかなあ。」

多分慌てて食べて喉に詰まらせたら大変だからね。

「飲み物もいろいろあるんだね。とりあえずこの何故か敷き詰めるかの様に入っている牛乳にしようっと。」

ミルクー牛乳。聞いた事も見たこともない牛乳だけど試しに飲んでみようかな。

『悠華頭の上の奴が早くしないと腹が減って死にそうだよ。』

「……………ブギー。」

「ごめんごめん。じゃあ食べようか?」

少しぐったりとしたブギウギを頭の上からおろしながらボクは椅子に腰かけて膝の上にブギウギを乗っけてあげる。

「今切り分けるからね。はいどうぞブギウギ。」

切り分けたホットケーキをフォークで刺してブギウギの口元へと持っていく。

「……………ブギ。」

それを力なくブギウギは口の中で咀嚼する。

「どうかな?もしかして美味しくなかったかな?ホットケーキは結

構自信があつただけだ。」

「……………ブギボー!!」

ほっちゃんを飲みこんだブギウギは突然膝の上で跳び跳ねる。(ちなみにほっちゃんとはこのホットケーキの名前。)

「ブギウギ!?!どうかしたの?」

『良かったじゃねえかこんな美味しいもの食べた事ねえってよ。』

「ブギ!ウギ!!」

「良かった。気に入ってもらえて。はいどうぞ。」

口を開けて次を催促するブギウギにボクは再度切り分けて口に運ぶ。それを繰り返して10分位経ったのかな?

「ブギボー。」

『もう食べられないそうだ。』

「まあ十枚全部食べればそうなるよね。そんなに美味しかったならボクもほっちゃんも嬉しいよ。それにしてもこの牛乳美味しい。これで何か作ってみようかな。」

牛乳を使ったお菓子ならやっぱりケーキだね。これだけ濃厚な牛乳ならいいのが作れそうだよ。

『ホットケーキか俺も封印されてなければ食べてみたかったもんだ。』

《ニヤー。》

『凜々は食べねえだろうが。』

「あはは。それでブギウギはどうしようか？」

「ブギギ。」

ホットケーキを食べてお腹というか身体を膨らませたブギウギは再びボクの頭の上に乗っかる。

「そんなにボクの頭の上が気に入ったのかな？」

『どうやらお前と一緒にいたいんだとよ。』

「そうなの？」

「ブギウギ。」

『悠華の事が好きになったんだとよ。』

《ギニヤー!?》

「もしかして今のボクはモテ期なのだろうか？」

「ブギウギ。」

頭の上でころころと転がるブギウギに手を伸ばしながら自分が今まで誰かに好かれた事がなかった事を思い出す。

「まさに灰色の青春だねえ。」

「まあいいじゃねえか。今は好きになつてくれた奴が二人もいるんだからよ。しかし魔族に好かれるとはこりゃあ厄介な事に巻き込まれそうだなあ悠華は。」

「ねえミカエルさっきのリ・クリエの説明の時からきになつてたんだけど魔族って何？」

「まずはそこから説明しなくちゃならねえのか。いいかよく聞けよ。魔族っていうのは基本的に自分の欲望に忠実に行動する奴らでな。本来ならここではない魔界という世界でくらしているんだが。中には人間界にくる奴らもいるわけだ今お前の頭の上にいる奴らみたいにな。」

「ブギボー。」

「ほうほう。」

わかった様なわからない様な。

《ニヤー。》

「ホントに分かつてんのか？ああそれと大丈夫だとは思うが七大魔将っていう言葉を聞いたら逃げろ。そして絶対にかかわるなよ。」

「ん？七大魔将って何？」

「魔族の中でも強い力を持つ奴らだ。いいか絶対魔将には関わるな

よ！』

「そこまで言うなら。わかったけど魔将の人達はお菓子食べないかな？」

『言ったそばからこれかよ。』

《ニヤー。》

「ブギウギ。」

「わかったわかった。とりあえず後片付けしたら今日はもう寝るかな。」

携帯を開いてみると22時30分であった。

「ブギウギ。」

『そいつも手伝うだよ。』

「本当？ありがとうブギウギ。なら洗った食器を拭いてもらっていいかな？」

「ブギ。」

使った食器を水に浸けながらボクはこれからの事に想いをはせる。

「明日は下の町に行ってみようかな。それでいろいろと見て回ろうかな。」

新しい友達もできたし明日は何かいい事がありそうだな。  
いやきつとあるはずだ。

『明日の事を考えるのはいいんだがよ。いい加減に拾ってくれねえか？』

あ、忘れてた。

お菓子な男の娘と初めての友達（後書き）

現在の悠華のアシストキャラ

神位第1位 究極神ザ・ゼウス

・お姉ちゃんのご加護  
味方のEXゲージを最大にする。

ミカエル（ロザリオ）  
・リフレクション  
味方のHPを回復する。

凛々（車）

・突撃自動車  
（敵に最大速度で突撃する。）

ブギウギ（魔族）

・体当たり  
（敵におもいつきり体当たりをする。）

アシストはこんな感じでしょうか？

まあこちらでも修正する予定です。  
何か意見やおかしなところがあったら遠慮なくお願いします。

お菓子な男の娘と青空教室とシンデレレと時々変質者(前書き)

投稿遅くなってすみません。

今回はなんとか原作キャラでました。絡みはそこまでないんですけどね…。

## お菓子な男の娘と青空教室とツンデレと時々変質者

悠華 side

ブギウギにホットケーキを食べさせて後片付けをし終わったボクは凜々の中にあつたベッドにダイブしてそのまま眠った。そして早起きしてケーキを焼こうとしたんだけど。その筈だったんだけど……。

『よし、悠華今から特訓を始めるぞ。ミカエル先生の青空教室だ  
！！』

「状況が全く見えないんだけど？」

早起きしたボクはケーキを焼く事は出来なかった。何故ならミカエルによって外に連れ出されて今は凜々が停めてある丘の上にいるわけなんだけど。

『昨日のお前を見てたら不安になってな。少し早い気もするが力の使い方を学ばせようと思ってな。』

「力？体力は人並みには有ると思うんだけど。」

『そういうのじゃねえ。お前の中に内包されてる魔力の使い方と俺がお前に与えてやる力についてだよ。』

そういえばゼウスさんが魔力がどうのこうの言ってたよな。

『とりあえず百聞は一見にしかずだ。俺を握って目を瞑れ。そして願うんだ。力を貸してパパンって。』

「投げていい？」

『すまん。とりあえず握って目を瞑れや。』

「はいはい。……………こうかな？」

ボクは言われた通りにミカエルを包み込む様に両手で握る。すると頭の中に言葉が思い浮かぶ。まるで詩の一説のような。

その言葉は……………。

『偉大なる超絶スーパー大天使ミカエルお父様お力をお貸しくださってあだっ！？』

とりあえずそんな言葉ではなかった。今のはミカエルが悪かった筈なので投げたボクは悪くない筈。

『すまねえ反省してるから拾ってもう一回してくれねえか？』

「反省したならいいんだけど。次したら町の方向に投げるからね。」

ボクはミカエル（ロザリオ）を拾って再び包み込む様に両手で握り目を瞑る。

すると先ほどと同じ様に言葉が頭の中に思い浮かぶ。

『頭の中に浮かんだのを言ってみな悠華。』

「わかった。ええと。……………主は此処にあり、全てを導く閃光とな

れ天輪の守り手ミカエル!!」

そしてその瞬間ボクの身体が暖かい光に包まれる。

『かあっこいいー!!』

「それでミカエルこれで何がって………あれ?何か服が変わってないこれ?」

手に握っているミカエルを問いつめようとするが自分の服装が可笑しくなっている事に気づき服装を確認してみる。

「何これ何か絵本の中にいる白馬の王子様みたいな格好は?マントまでついてるんだけど。」

『王子様!?そんなちなけなもんと一緒にするんじゃないやねえ!これは俺様大天使ミカエルが悠華の為だけに用意した霊力を編み込んだ所謂霊力の塊だな。これによってお前は俺様の霊力を扱う事も出来るようになった。そして変身したその姿は名付けて!!銀河男の娘悠華だ!!』

「これでボクはどうすればいいの?」

『腰のところに銃が付いてるだろ?先ずはそれを取るんだ。』

その言葉に腰辺りを見ると腰の右側に白くて綺麗な宝石がたくさんついた銃がホルスターに入った状態であった。

「おお綺麗な銃だね。この宝石本物?」

『んな事はどうでもいいんだよ。両手でそれを持って構えてみる。』

「わかったけどもしかして射てとでも言うの？」

装飾銃を取り出して言われた通りに構えてみる。

『そのまま引き金をひいてみるや。』

「本当に射つんだ。よし！！」

ボクのは手近にあった岩を狙って引き金を弾く。だけど……………。

「何もでないんだけど。」

『弾入ってないからな。そりゃそうだ。まずは弾の入れ方からだ。』

「シリンダーに弾を入れればいいんだよね。だったら早くちようだい。」

『残念ながらこの銃ライトシューターには実弾は使えねえ。使えるのは魔力を籠めた魔力弾、もしくは霊力を籠めた霊力弾だけだ。』

何かまたもや聞きなれない単語が。

「ねえミカエル魔力に霊力って何なの？」

『単純にいつちまえば魔族が持つ魔法を使う為に必要な力を魔力。天使達はその身を保つ為に必要としている力を霊力と言うわけだ。そしてお前にはゼウスにより莫大な魔力をそしてこの姿に変身した時には俺様が霊力を貸してやる。すなわち今のためえは大量の弾薬』

を身体の中に抱えこんでいるって言うわけだ。とりあえず今から俺が言う通りにやってみるよ。まずは目を瞑れ。』

ボクは火薬庫か何かなのだろうか？  
などと思いつつも再び目を瞑る。

「瞑ったけどどうするの？」

『焦るなよ。まずは自分の中にある魔力と霊力を感じるところからだ。そうだな……。』

魔力と霊力を感じる、そういうえば何か変身？した時なら変な感じがあるんだよね。身体が熱いというか涼しいというか。熱いけど涼しいというか。とりあえずミカエルにでも聞いてみようかな。

「ねえミカエル。」

「なんだ？」

その事をミカエルに説明してみる。

『素質があるのかも知れねえな。それともゼウスが何かやったのか？』

「ん？」

『まあいい、とりあえず今お前が感じているのが魔力と霊力だ。第一段階はクリアだな。次は魔力及び霊力の充填だ。目を瞑ったままお前の中にある二つの力のどっちでもいいからライトシューターに籠めてみるや。』

「どっやって？」

『知りたいなら教えてミカエル先生って言うんだ。』

「教えてミカエル先生（棒読み）。」

『やる気が感じられねえが大目にみてやる。まずは身体の中にある魔力をライトシユーターの中に流すイメージを試してみろや。』

「わかった。やってみるね。イメージ、イメージ。」

『身体の中にある血管を延長してそのライトシユーターに繋げるイメージを作れ。』

あんまり考えるのは得意じゃないんだけど……。

そう思いつつも意外と簡単にイメージが出来てしまう。

そして繋がった血管を通して魔力という名の血液がライトシユーターに流れこんでいく。

『見事だな。よし充填をやめろ。』

「急に止めるって言われても…あれできた…？」

「またもやイメージ通りに魔力が流れ込むのが止まってしまっ。こうまで簡単にいくと何だか意図的な物を感じるなあ。」

「ねえミカエル、何だか簡単に行きすぎている様な感じがするんだけど。もしかしてゼウスさんが何かしてくれたのかな？」

『…これはいくらなんでも。』

「ミカエル？どうかしたの？」

『い、いやなんでもねえよ。よし次は実際に射ってみるや。ちょうど良い感じの的もある事だしな。あの大岩に向けて射ってみる。』

「わかったよ。やってみる！イメージ通りにやれば、これで！」  
ボクは少し離れた位置にある大岩に向かってライトシューターに込められた魔力弾を射つ。

『よし暴発もないな。』

ドゴン。という音を立てて砕け散る大岩。ライトシューターの放つ魔力弾はかなりの威力を持っているのはわかった。やっぱり少し怖い。

そんな事を考えていると…。

《ギニヤ！？》

凜々の上げた突然の声に驚きそちらに目を向けるとライトシューターによって砕かれた大岩の一部が凜々に向かって落下している姿を確認する事ができた。そしてその岩の一部が落下すれば凜々が傷つく事は容易に想像できた。

『上空に飛んでいたのに気付くのが遅れたか、凜々避ける！！』

《ニヤ、ニユ、ニヤー！！》

ミカエルも危機感を感じて凜々に避ける様に指示を出すけど凜々は恐怖で動けない様子である。

そんな時ボクの気持ちは……。

『仕方ねえ、悠華俺をあれに向かって投げろ!』

「……助けなきや。光よ我が同胞に降りかかる災いを討ち滅ぼせシヤイニングバースト!」

『何だと!?!』

ライトシューターのシリンダー全てに霊力が充填される。そして充填された霊力がシリンダーを回転させて銃身を通して全て放たれる。

『こんな密度の濃い魔法を放つとは……。』

ボクも何か言った方が良かったのかもしれないけれど今はライトシューターから放たれる膨大な霊力に圧倒されてしまう。その霊力を制御するのに精一杯でもう岩は破壊しきったというのに魔法を止める事ができないでいた。

「み、ミカエルこれ止まらないんだけど……。」

『咄嗟に籠めすぎた霊力を射ち尽くすまではとまらねえ。……まあ頑張れや。』

「手が痺れてきたんだけど……。」

《ニヤニヤ。》

『見る限りは確かに綺麗だよな。……だが少し乱暴とは言え咄嗟に全ての弾倉に霊力を流し込むとはな。これは素質があるからならんてかの話しじゃねえな異常だ。』

「何か言った？…あ、やつと止まった。」

ミカエルが何か言ったみたいだけどどうせ変な事言ってるんだよ。そして今ボクの視線は手の中で熱を持って銃口より白い煙りを放つライトシューターに釘付けにされていました。

「何か頭痛い。凄く疲れた。」

そして急に身体を襲う倦怠感。なんだろう身体がだるいし眠い。

『あれだけ霊力を急に消費したんだ。そうなって当然だ。』

「…お休みなさい。」

難しい話は勘弁してほしいよ。もう一步も動けない。ああ草が良い感じで柔らかくてベッドみたいだよ。

『おいおいこんなところで寝るなよ。凜々の中で寝ろや。』

「無理。もう一步も動けない。…ぐうっ。」

そしてボクの身体と意識は眠りにつきました。…風邪ひきそうだなあ。

ミカエル side

『魔力と霊力の同時制御んな事ができるなんて…。』

普通じゃねえ。出きるのは極僅か。それに魔力と霊力を同時に二つ

持っている奴なんて普通はいねえからな。

今、草原に縮こまって寝てる悠華は不思議な奴なのはまあ最初からわかってはいたが…。

『魔力はゼウスより与えられて霊力は俺が貸し与えてやがる。普通ならこんな初期の段階では綿密でこまけえ作業が必要なライトシューターに魔力や霊力を入れ込む事もまともにできねえはずだ。』

それなのにこいつはそれを意図も簡単に…。いやまるで出来て当たり前かの様にやりやがった。これも正しくはねえな。

『まるでした事があるみたいな感じだったが。しゃあねえ。あいつに聞いてみるか。俺一人で考えても埒があかねえや。』

《ニヤニヤ（あいつってゼウス）？》

『何だ凜々はいいつは嫌いか？』

《ニヤ（嫌い）。》

『またなんでだよ。』

《ニヤニヤ（悠華を取りそう）。》

『ひやははは。大丈夫だ！あいつにはそんな度胸はねえよ！さてとおっ始めるか。』

俺はゼウスと連絡を取る為に霊力を消費してロザリオに埋め込まれた宝石を通して消費した霊力を、まあ映画館の映写機の容量で別世界にいるゼウスを映し出す。

『何よミカエル？悠華は？』

『今は寝てる。』

『本当ね。寝顔まで可愛らしいわ。でも何か顔色が悪くないかしら？』

『さつき靈力を一気に消費したからな。』

『待ちなさいよ！どうしてそんな事態になるのよ！？』

こいつも澄ました顔してやがるがやっぱ悠華の事が心配みたいだな。悠華の状態聞いた途端に顔色変えやがって。

『いや、なにあいつに身を守る術を教えてやろうと思ってな。』

『怪我は！？』

『大丈夫だ。本当に疲れて眠ってるだけだ。』

『…そう、で用件は？それが本題っていうわけじゃないんでしょう？』

『察しがいいな。流石は神の中の神ゼウスだ。』

『褒めても何もでないわよ。鳥肌は出たけどね。』

『ひやははは。とまあここからは真面目に行こうや。確認だお前が悠華に与えた物を言ってみろや。』

『いまさらね。一つは貴方よ。大天使ミカエル。二つ目は身体能力  
その世界で強敵と渡り合える程度に。三つ目に魔力。七大魔将で  
ある二ベの魔女さえも上回る程のね。もちろん多量の魔力保有の為  
の魔族化は大丈夫よ。制限は掛けてあるしね。』

《ニヤ（私も悠華にあげた）。

》

『って凜々あんたよくも人の事敷き殺そうとしてくれたわね!!』

《ニヤ（ばーか）》

『調子にのらない方が良いわよ。このイタ車!!』

『って話が脱線してるだろうが…。お前がやったのはそんだけか…。

』

『そうよ!…それで結局貴方は何が聞きたかったのよ?』

『あいつ霊力と魔力のコントロールを一発でやりやがった。しかも  
意図も簡単にだ。』

『冗談ではなさそうね。言っておくけど私は悠華に知識や経験を与  
えていないわよ。私は悠華には世の中の厳しさを知ってほしかった  
から魔力と霊力を与える存在である貴方しか与えなかったのよ。』  
『ただセンスがある。資質が素質があるってわけじゃなさそうだな。

先祖が凄いとかはどうだ?』

先祖に凄い奴がいると子孫にそのセンスが受け継がれていたりする事があるんだが…。

『悠華はただの人間のはず。両親はただの人間。先祖に可笑しな力を持った人物もいないはずよ。彼の家系を調べ直してみようかしら？』

『まあこつちも何か進展があつたらまた連絡するわ。そろそろ悠華が起きるみたいだしな。寝起きにお前の顔を見せるのも酷だしな。』

悠華の瞼が今ピクリと少し動いた。まあこれだけでかい声で喋れば（主にゼウス）目を覚まして当然か…。それに俺<sup>ロザリオ</sup>本体は悠華の首にかかっているからな。

『はあ！？私の姿を見たら感激して喜ぶに決まっていますでしょう？』

『はいはい。じゃあな。』

『ちよつと！待ちなさい悠華ー！！ゼウスお姉ちゃ……………。』

ゼウスの事だ愛情が暴走して悠華に下手な事言いかねないからな。ゼウスには悪いが通信は切らせてもらったわけだ。

『ゼウスでもわからないか…。まあそこまで気にしなくてもいいかもな。でも何か嫌な感じがするんだよなあ。』

「今ゼウスさんの声が聞こえたような？」

まだ半覚醒っていうところが瞼が半分だけ持ち上がった状態

で上半身のみを起こして俺を見下ろす悠華。下手な事は言えねえな…。ここは慎重に対応しねえとな…。

『気のせいだ。』

「そうなんだ。おやすみ。くかー。」

また寝るのかよ…。久しぶりに真面目に考えた俺が馬鹿みてえじゃねえか。

『はあ。煙草吸いてえな。』

《ニヤニヤ（悠華可愛い。）》

悠華 side

「はっ！？寝過ぎした！」

肌寒さを感じてボクは身体を起こす。そして空を見ると既に夕日が上がっていました…。あれは朝日、なわけないよね。

『寝すぎだ。もう夕方だ。』

「ゆ、夕方！？た、大変だよ！夕飯の買い出しにいかないと！」

『おいおい。食いもんなら凜々の中にあるだろうが。』

「ちょっと位町にも行って見たいのだよ。」

『俺も連れていけよ。』

「わかってるよ。じゃあ凜々行ってくるねー。」  
凜々に声を掛けてボクは丘を下っていきます。そう魔力と霊力を扱う練習をしたままの恰好で…。

《ニヤー。》

見送る凜々の鳴き声がなんとなく悲壮感を感じさせていました。

悠華& amp・ミカエル移動中

「一通り目星はついたから明日買いにこようっと。」

商店街に訪れたボクはいろいろ見て回りました。どこのお店も閉店ぎりぎりだったけど…。それと何故か皆から不思議な物を見る様な目で見られたんだけどどうしてだろう？ちなみに今日買ったのは天川牛乳販売店に売っていたミルクィ牛乳。美味しくて飲んでいたらストックが少なくなっただけから買い足しに来たわけである。そして今は帰り道。何やら港みたいなところにボクはいました。

『明日は何を買った？また牛乳か？そんだけ買ったのにまた買うのか？』

「ううん。買ったのは簡易的なテーブルや椅子なんかをね。」

『んなもん何の為に買った？』

「凜々をお願いしてお店を開こうかなって思っているんだ。」

『なら別に買わなくてもいいんじゃないかねえのか？』

「どういう事？」

『凜々はただの車じゃねえ。一種のつくも神でな凜々の中は必要と思つたものが何でも揃うんだ。言つてなかつたか？』

「聞いてないよ。」

「なら買わなくてもいいのかな。」

『みたいだな…。ゼウスの奴にも何か頼み事があつたら遠慮なく頼れや。あいつもなんだかんだで心配してたからな。無論俺も頼れよ。』

「わかつたよ。」

…よいしょ。ここは良い世界だね。さっきの商店街の人達も親切だったし。」

近くにあつたベンチに座るとボクは星空を見上げます。

『なんだ親切にされるのは嫌か？』

「そうじゃないんだけど。…慣れないと言つかなんというか…。」

昔は親切にされた事なんてなかつたからね。あつたとしても下心丸見えだつたかな。それに比べてこの世界の人達は下心なんてまるで見えなかつた。とても純粹だった。

『…………。』

「そろそろ帰る」や、やめてください!!」「…はえ?」

『何だ?』

「お、女の子が暴漢に襲われている助けなくちゃ!」

叫び声が聞こえた方向。ちょうどボクの真後ろを振り向くとそこにはツインテールの女の子が金髪の長身の男の人に手を掴まれているところであった。

『おい!待て悠華!』

ミカエルの制止の声を無視してボクは二人の間に割り込みます。

「待たない!こらー!やめなさい!!」

「おお、なんと!」

長身の男の人は目を見開いてボクの事を驚きの目で見つめています。

「素敵だわ…。」

ツインテールの少女はボクの姿を見た途端に何やらキラキラしました。オーラの物が出だしたよ。

「ちょっとそこのお兄さん！」

「私の事でしょうか？麗しき男装の姫君。」

麗しき男装？姫君？どついう意味なんだろうか？

「…ん？よくわからないけど彼女が困っているでしょう。男の子にはやってはならない事があるんだよ。一つはお菓子を馬鹿にする事と女の子を泣かせる事！」

「なんとという美しさ。怒った顔も素敵だ。」

「ほんとうだわ…。」

「むむむ。とりあえず以後女の子が嫌がる事はしたら駄目ですよ！」

「ええ、貴女という美しい女性がいたというのに声を掛けなかったとはなんとという失態！今日は貴女の機嫌を損ねてしまったようですね。後日また改めてご挨拶に参ります！では！！」

よくわからなかったけど男の人はもの凄いスピードで走り去っていききました。去り際が暴漢だとは思えない程華麗でした。よくわからない人だったなあ。

「何だったんだろうあの人？あ、そうだ大丈夫でしたか？」

「は、はい！貴女が助けてくれましたから。」

「そう。なら良かった。変な事されなかったですか？」

「大丈夫です。あの人しつこく絡んできただけでしたから。本当に何だったのかしら！？でもそのおかげで貴女と出会う事が出来ました。あの名前を聞いてもいいですか？」

「あ、えっと。悠華です。橘悠華。」

「悠華さん。なんて綺麗な名前なのかしら。」

「あ、ありがとう。良かったら貴女の名前も聞いていいですか？」

「あ、ごめんなさい。私つたら…。聖沙です。聖沙・B・クリステ  
ブリジット  
レス。」

「という事はハーフさん？」

見た感じも日本人には珍しい綺麗なブロンドだし名前から判断するにそうではないかと思っただけだなあ。

「正確にはクォーターですよ。そう言う悠華さんは？」

「え？ボクは純粋な日本人だよ。」

「ぼ、ボクっ娘って素敵だわ…。」

「あ、あの聖沙さん？」

またもやキラキラとした聖沙さん。あのオーラはどこから出て

るのだろうか？それとボクっ娘ってなに？

「ごめんなさい。でも悠華さん顔も整っているし髪の毛も素敵な色ですよ。」

「ありがとうございます。聖沙さんもとっても素敵なブロンドですね。」

水色の髪は父の方から受け継いでいるんだよ。確かによく知り合いに珍しいって言われていたっけ。

「このブロンド私の自慢なんです。でも悠華さんの美しさに比べたら…。」

「あの聖沙さん？」

「悠華さん貴女は私の王子様なんです。」

突然私の両手を包む様に握ってきた聖沙さん。いつもなら飛び上がって驚くところだけど、今は別の至極重要な事に気付いてしまった為に意識が全てそちらにむかっていた。

「王子様？…っ！？」

「悠華さん、どうかしました？」

「あ、ボクこの恰好…。」

「とっても素敵ですよ！寧ろ」「ごめんなさい！」「ゆ、悠華さん！？」

まさか変身した恰好でずっと出歩いていただなんて…。通りで商店街で会う人会う人皆が不思議な物を見る様な目で見ていたわけだよ…。

「恥ずかしすぎるー！！」

ボクはあまりの恥ずかしさに聖沙さんの事も放って凜々の元に帰る為に走り出しました。

聖沙さんごめんなさい…。

聖沙 side

「行ってしまったわ。悠華さんまた会えるかしら？…何か落ちている？」

素敵なまるで絵本の中から出てきた様な恰好をした悠華さん。彼女の後ろ姿に私に訪れた春を感じながら地面に何かが落ちている事に気付いて拾いあげるわ。

「これはメモ帳？悠華さんのみたいだけど…。少しだけなら見てもいいわよね。」

拾ったメモ帳には表紙に何故か平仮名でたちばなゆうかと書いていました。

もしかしたら悠華さんの想いを綴った素敵な日記やポエムを期待した私は少し躊躇しながらもメモ帳を開きます。

「これはお菓子の作り方、レシピかしら？悠華さん字も綺麗ね…。」  
メモ帳に書かれていたのは丁寧にかかれたお菓子のレシピ。お菓子作りがまともにもできない人でもこれを見ればここに書かれたのがお菓子のレシピだという事が理解できて簡単に作れてしまうのではな  
いかと思う程のもの。でも悠華さんはどうしてこんな大切な物を…  
…。

「…わかったわー！これはガラスの靴なのよ！悠華さんが私にまた会いたいという想いを籠めてこれを置いていったのね！わかったわ悠華さん。私が貴女を探し出してこれを届けて見せるわ！そ、そして…キヤー！！！」

私は隠しきれない喜びを胸に秘めて家までの道筋を辿りつていくわ。まさか逆シンデレラだなんて悠華さん…。

悠華 side

『ひゃあはははははははははははは！』

「そんなに笑わないでよ…。っていうかミカエル気づいていたなら教えてよ！」

『いやいやそんな事したら楽しめねえだろうが？』

「もうやだ。ただいま凜々。」

ミカエルの耳に響く笑い声を聞きながらボクは凜々を停めてある丘にたどり着きました。

《ニヤア。…ニヤー!!》

「どっしたの？」

何やら帰ってきたボク達を見て鳴き声を荒らげる凜々。

『他の女の匂いがするわ!どこの女と会ったのよ!!だとさ。』

「聖沙さんっていうブロンドで可愛い女の子だよ。せっかくだからお菓子ご馳走できれば良かったなあ。」

《ニヤニヤ。》

『悠華は色事よりお菓子に一筋。良いところついたな凜々。だがあれは間違えなくフラグ立てやがったぜ。ひゃひゃ、流石我が息子だぜ。』

フラグってなんだろう?旗かな?

それとボクはミカエルの息子ではないよ。

「ブギボー!」

ミカエルに文句を言おうとするんだけどブギウギが頭の上に飛び乗ってきたせいで意識がそちらに向かう。

「あ、ブギウギもただいま。お腹すいたでしょう?今何かつくるね。」

「

「ブギウ。」

「何を作ろうかなあ。…あれ？レシピがない。」

変身を解いたボクはズボンのポケットからお菓子のレシピを取り出して何を作ろうか考えようとするんだけどレシピを書いたメモ帳がなくなっている事に気付く。

『さっきの港で落としたんじゃないのか？』

「かもね。」

『拾いにいかねえのか？』

「まあレシピは頭の中に入ってるからね。そんな事よりも今は腹ごしらえだよ。今日は疲れたからね。少し贅沢しちゃうー！」

確か凜々の中にあつた冷蔵庫にステーキ肉があつた筈。それを焼いてみよう。

「ブギウーー!!」

『食べきれるだけにしておけよ。』

「了解！それにしても今日はお菓子作れなかったけど明日は作れるといいなあ。」

空を見上げると夕日も落ちて星がぽつぽつと輝き初めていました。  
きっと明日も良い出会いと美味しいお菓子に出会える。  
そして今日も1日が過ぎていきました。

お菓子な男の娘と青空教室とツンデレと時々変質者(後書き)

現在の悠華のアシストキャラ

神位第1位ザ・ゼウス

大天使ミカエル

凜々(車)

ブギウギ(魔族)

**お菓子な男の娘と色欲の七大魔将と魔王（見習い）（前書き）**

遅くなったのですが無理矢理感が満載です。  
とりあえず原作キャラ二人登場。

## お菓子な男の娘と色欲の七大魔将と魔王（見習い）

悠華 side

現在の時刻午前5時。空もまだ薄暗く朝日が昇り始めたばかりである。

何故ボクがそんな早くから起きているのかというと…。

「ケーキはこれだけ焼けばいいとして……。クレープなんかは生地をストックして頼まれてから作る。ドリンクも何故があったサーバーに貯めたと。消毒も完璧。」

前々から計画していた凜々を用いてのお菓子の移動販売。それを本日実行しようと朝早くから起きてケーキを焼いたりしていたわけなのです。目標としてはお昼前には販売を初めたいので朝早くから焼かないと間に合わないのです。ちなみにテーブルには合計20種類程のケーキが並んでいます。

「すげえ数のケーキだな。これだけ並ぶと壮観だなあ。」

「ボクもこれだけの量のケーキを焼いたのは久しぶりだよ。後は切り分けてショーケースに並べてと…。」

「終わったたら少し位は寝た方がいいんじゃないか？あんま寝てねえだろ？」

「大丈夫だよ。4時間位は寝たから。それにショーケース並べ終わったらメニューにテーブルやパラソルの確認をしなきゃいけないからね。」

『そうか…。まあそんな生き生きした顔してやっってるのを止めるつもりはねえがあんま無茶はすんなよ。』

「ありがとうミカエル。なんだか優しいね。」

『お前の親父だからな！！』

「はいはい。そうですね。」

『おっ！認めたな！今親父って認めただろ！！』

「アイスは今回はやめておこうかな…。」

でもクレープを作るならアイスがないと作る幅が狭まるからなあ。

『って無視かよ！！』

それから2時間経過。現在の時刻午前7時。お菓子などの準備も完了して今は朝ごはんの準備中です。

「ブギウー！！」

「待ってねブギウギ。もうすぐできるからね。」

7時になるとお腹を空かせたブギウギが起きてボクの頭の上に乗ってご飯のおねだりを開始。ブギウギの定位置なんだねボクの頭は。

「今日のメニューはトーストにベーコンエッグにマカロニサラダにコーンスープ。」

「ブギギー!!」

できた料理をテーブルに並べているとブギウギが待ちきれないのか頭の上で跳び跳ねる。なんだかぽよんぽよんして少し気持ちいいかも。

「ブギウギ食べるならボクの頭の上から退いてね。」

「…ブギ。」

素直にテーブルの上に降りるブギウギ。口の端から涎が……。まさか頭の上についてないよね…。

『なんだ悠華は菓子以外も作れるんだな。』

「まあこれ位はねえ。」

昔家にいた時はよく自分で作っていたからね。それに料理は好きだから。

「ブギ!ウギ!!」

『早く食べさせるだよ!!』

「ごめんごめん。それじゃあ食べようか?いただきます。」

「ブギウギ!!」

「そんなにがっつかなくても誰も取ったりしないからね。」  
ベーコンエッグにかぶりつくブギウギを見つめながらボクはパンをちぎってコーンスープに一度付けてから口に運ぶ。

「今日からついにお店を開くんだよね。…そういえば許可とかもら  
ってないけど。」

柄の悪い人達に場所代寄越せとか言われたりしたらどうしよう？

『そんなもんいらねえだろう。なんたってこっちのバツクには究極  
神ゼウスがついているんだからな。』

「そ、そんなものかな？」

『そつだそつだ。細けえ事は気にすんな！それで今日はどうするん  
だよ？』

「ご飯を食べたらとりあえず凜々で下に降りてみるよ。そこでお菓  
子を売ってみようかなって。」

『そうか。じゃあ腹ごしらえはちゃんとしろよ。早く食べねえとブ  
ギウギに全部食われっぞ。』

「わかったよ。ってブギウギそれボクの卵だから！」

「ブキユ！」

ブギウギにかぶりつかれた卵をなんとか取り返して（既に半分は食  
らい尽くされていた）ご飯を食べ終えたボクは今現在昨日聖沙さん

と出会った港にてお菓子を販売しているわけなんだけど……。

『客こねえな。』

《ニヤア。》

「閑古鳥が鳴くってというのはこういうのを言うんだね。」

エプロンを付けたボクは凛々にてお菓子を販売していたんだけど……  
全く売れないでいました。人っ子一人来ないんだよ。

「……ぶぎー。」

ブギウギはご飯を食べた後そのままボクの頭の上でお昼寝を始めちゃったよ。

「知名度がないとは言っても一人位は来てくれても良いんだけどなあ。」

『場所が悪いんじゃないのか？』

《ニヤー。》

「どうなんだろうね？人はちらほら通るんだけど。」

見向きもされてないんだけどね。

ビラでも配った方が良いのかな？

等と暇を持て余していたボク達だったんだけど……。

「このようなところで出会えるとは貴女とは運命的な物を感じますね。男装の姫君。」

暇を持て余していたボク達の前に現れた一人の長身のメガネをかけた男の人。

「お兄さんは確か昨日の……。」

「おお、覚えていてくれましたか姫君！」

「……昨日の変質者さん！」

「ぬ、ぬう。その認識には間違えがありますよ姫君。私の名前はメルファス。メルファスとお呼びください。」

昨日の変質者さんもといメルファスさんはボクの変質者発言に軽くよろめきながらも優雅に一礼をして女性なら見とれてしまう様な笑みを浮かべる。だけどボクは男なんでなんともないんだけどね。

「ご丁寧にありがとうございますメルファスさん。ボクの名前は悠華です。橘悠華。」

「悠華姫……。なんて素敵な名前なのでしょうか。」

「ひ、姫？あ、ありがとうございます。ところでメルファスさんはボクに何かご用でしょうか？」

「ここに来れば貴女に出会える様な気がしましてね。そしてそれは実現しました。貴女は今私の目の前にいるではありませんか。」

な、なんだか見た目も言ってる事もよくわからない人だけど結局何をしに来たんだろうか？

「ところで悠華姫はこのようなところで何をなさっているのでしょうか？」

「あ、ええとお菓子を売っているんです。そうだ！メルファスさんよろしければお一ついかがでしょうか？」

「悠華姫のお誘いならば断るわけがありません。頂きましょう。」

「わかりました！ありがとうございます。ではこちらにお掛けください。」

ボクは変質者からお客になったメルファスさんをテーブルの一つに案内して椅子を引き腰をかけるように促します。

「失礼します。」

「こちらがメニューになりますか……。」

「では悠華さんのお薦めをお願いします。」

「は、はい。ではチーズケーキに飲み物は紅茶でどうでしょうか？」

「ではそれをお願いします。」

「では少々お待ちください。」

今自分のできる最大のスマイルをメルファスさんに向けて凜々の中へと向かいます。

「……可憐ですね。」

何やらメルファスさんが言った様だけどあんまり気にしないでおう。とりあえずショーケースよりチーズケーキを取り出してと紅茶の茶葉をティーポットにいれてからケトルで沸かしたお湯で紅茶を淹れる。

「茶葉はダージリンにしてと砂糖は角砂糖にしておこうつと。」

『よかつたじゃねえか悠華。初めての客だな。変な奴だがな。』

隙を見てなのかボクが凜々の中に戻ると口を開いてくる。まあ人前で喋られたら困るけど…。

「あはは。最初見た時は通報しようか迷ったけどね。」

『おいおい…。それにしてもあの男妙だな。何も感じねえ。』

「ミカエル何か言った？」

『何でもねえよ。』

「なら良いんだけど。これでよしとー！」  
チーズケーキのちー君と紅茶を準備をしておぼんにのせたボクは凜々から降りて直ぐ様メルファスさんへとそれを運びます。

「お待たせしましたメルファスさん。御注文のチーズケーキと紅茶

です。茶葉は勝手ながらダージリンを使用させていただきました。  
お砂糖はご自由にお使いください。」

「ありがとうございます。ではいただきますしよう。」

丁寧にフォークとナイフで切り分けられて口に運ばれていくちーく  
ん。美味しく食べられてよかったよ。まだ美味しいとは言ってもら  
ってはいないんだけど…。

「あ、あのどうでしょうか？」

「そんなに不安そうな顔をしないでください。とても美味しいです  
よ。人間界にはこのような美味しい食べ物があるとは驚きですよ。  
この紅茶も適温でもとてもいいですよ。」

そう言っつて紅茶を口に運ぶメルファスさん。でも今の発言ちよつと  
聞き捨てならないところが一つだけ。

「あのメルファスさん人間界でつてまるでメルファスさん人間じゃ  
ないみたいない方ですね。」

「おや、お気づきではなかったですか？私は人間ではなく魔族です。  
貴女の上でシエスタしている子と同様に。」

「そうなんですか！？ブギウギとは全然違うんですね。」

何事もないかの様にボクの頭の上で寝ているブギウギを指差すメル  
ファスさん。紅茶を飲む事は続けているけど…。

『…！？』

「他人は私の事を七大魔将色欲のメルファスと呼んだりしますね。それにしてもこのチーズケーキとは格別ですね。」

「魔将って確かミカエルが……。」

『悠華こいつはやべえぞ！いましてすぐ変身しろ！』

「これは驚きです。まさかロザリオが言葉を紡ぐなど……。」

ボクの首にかかっているミカエルを見つめるメルファスさん。少しも驚いているようにはみえないけど……。とりあえず誤魔化しておかないと……。

「あ、あのこれはミカエルって言うてですね。」

『馬鹿何言ってやがる魔将は危険だって言っただろっが！』

「かの天使長ミカエルとこんなところで出会えるとは。」

「ミカエルって有名人なの？」

「ええそれはかなり。」

大天使とか言ってたけどまさか本当に凄かったとは意外だよ。

『んな事はどうでもいいんだよ！早く変身しろ悠華！』

「で、でもメルファスさん悪い人とは思えないよ。お菓子を美味し  
いって言うってくれる人には悪い人はいないよ。」

「やはり面白い方ですね…。」

こちらの事はあまり気にしてはいない様でゆつくりとチーズケーキ  
を切り分けて口へと運ぶメルファスさん。

『馬鹿野郎！七大魔将つてのは欲望に忠実な魔族の中でもさらに欲  
望的で危険な奴等なんだよ！こんな澄ました顔してる奴でも腹の中  
では何考えてるのかわかったもんじゃねえ。』

「そうなんですか？」

「確かに欲望で行動しているのは事実です。でもそれは悠華さん貴  
女もそして天使長ミカエル貴方も一緒の筈ですよ。」

「あ、そっか！ボクがケーキを食べてもらいたいっていうのも欲望  
なんだ！」

「物分かりが良くて助かります。ちなみに私の欲望は世界中の女性  
達とお知り合いになる事です。」

「ああ、なんとなくわかります。」

今までのメルファスさんの行動を見ていればなんとなく想像はつく  
よね。

『なんだこいつ。』

「ためえ闘う気はねえのか？」

「どうして私が悠華さんと闘わなくてはいけないでしょうか？私が拳を振るうのは女性に不埒な真似をはかる愚か者だけにですよ。」

「そうなんですか。」

「ええ。でも中には良からぬ事を考えている同胞もいるようですけどね。ごちそうさまでした。」

チーズケーキを綺麗に食べ終えて紅茶を飲み干したメルファスさんは懐から取り出したハンカチで口回りで拭くと立ち上がる。

「お粗末様です。美味しく食べて頂いてありがとうございました。」

「それでは今日はこの辺で失礼します。とても有意義な時間を過ごさせてもらいましたよ。悠華姫何かあったら直ぐ様私を呼んでください。それでは世界中の女性が私を呼んでいるので。」

そう言つて薔薇の花びらを撒き散らして走り出すメルファスさん。でもメルファスさんのむかつている方向は行き止まりの筈だけど…。あ、引き返して帰つていった。全然優雅じゃないね。

「また来てくださいいねー！！」

『ったくいけすかねえ野郎だったぜ。』

「そうかな？面白い人だったけど。…ってメルファスさんお金払って来てないよ！」

『食い逃げかよ！！』

なんだろう。メルファスさんとはまた何かありそうだ。

なんとなくそんな予感がしました。

今度会った時はちゃんとケーキの代金を払ってもらおう事にしよう。

メルファスさんが食い逃げしてから二時間程経ちました。

「駄目だ。全然お客がこないよ。」

『やっぱり場所変えた方がいいんじゃないかねえのか？』

「かもね。凛々場所変えようか。」

《ニヤニヤ。》

テーブルやパラソルをたたんで凛々の中に直したボクは凛々にお願いしてお菓子を販売する場所を変える。

「場所変えても誰も来ないんだけどミカエル。」

『まあ、お前の選んだ場所が悪いんじゃないかねえのか？また何で公園なんかに来たんだ？』

ミカエルの言った通り今は公園にいます。でもお客はいません。

「ブギウギ。」

《ニヤニヤ。》

「何だか凜々とブギウギにも馬鹿にされてるような気がするよ。」

公園だったら子供がたくさんいるんじゃないかなと思ったんだけどなあ。」

『だがいねえな。』

「言わないでよ…。せつかく作ったのに皆売れ残っちゃうのかな？」

ショーケースに並べられたケーキ達を自分が全て平らげなくてはいけないという想いを籠めて見つめていたその時であった。

「猫さん今助けてあげるからね!！」

「え？猫さんって凜々じゃあないよね？」

『こいつはニヤーニヤー言ってるだけで猫じゃねえ。』

《ニヤニヤ。》

聞こえてきた声は凜々の外からのようである。という事は公園からかな？

「いってみよう。」

『きいつけるよ。』

《ニヤニヤ。》

凜々とミカエルの声を背にボクは公園の中に入り辺りを見回す。

「女の子？猫を助けようとしてるのかな？」

ボクが公園の中で見つけたのは木の上で鳴いている猫を助けようとしているピンク色のクマの外套を羽織り大剣を背に背負ったなんとも個性的な女の子であった。

「大丈夫かなあ？あの猫が乗っている枝とても人を支えきれるとはとても思えないけれど…。」

ボクの心配をよそに女の子は猫がいる木の枝へと移り猫の身体を持ち上げる。

「もう大丈夫だからね。このマカロン様が来たからには安心していいからってきやあ!？」

ボクの予想通りと言うかなんと言うか木の枝は女の子を支えきる事ができずに猫を腕の中に抱いた少女は地面へと落下を開始する。

「あ、危ない!!」

だけどボクもそれを黙って見ていれるほど凶太い神経はしていないよ。全速力にて少女が落ちてくるであろう場所へと向かいます。ゼウスさんに身体能力を上げてもらっていて助かったよ。

『ナイスキャッチだ!』

なんとか少女を受け止める事に成功しました。正直ギリギリだった

よ。

「ビックリしたー。」

そして今現在少女はボクにお姫様抱っこされた状態で顔を少し青くしていました。

「大丈夫？怪我はしてない？」

少女を地面に下ろしながら怪我はないか確認する。見た感じ怪我なんかは見当たらないけど木の上でどこか切っていたりするかもしれないから。

「あ、うん大丈夫！ありがとうお姉ちゃん。」

「怪我がなくて良かった。でもボクはお姉ちゃんじゃなくてお兄ちゃんだからね。」

「そうなんだ可愛いからってつきり女の子かと思っちゃった。」

「か、可愛い…。」

昔から女の子みたいな容姿で性別を間違えられるのはあったけどやっぱり慣れないね。

「そつえば猫さんがいなくなってる!？」

「本当だ。そつえばいつの間にもやらいなくなってる。」  
「言われてみると確かに猫がいなくなっていた。でも猫は自由気ままな生き物だから仕方ないと思う。」

「でも猫さんが怪我しなくて良かったよ！」

「そうだね。でもあんまり危ない事はしちゃ駄目だよ。」

にひひと笑顔で笑う女の子。なんだか面白い娘だなあと思っていたボクだったんだけど女の子のお腹から聞こえてきた『ぐうー。』という音に少し驚かされてしまう。お腹空いてるのかな？

「ああ、お腹空いたー。」

「それならケーキで良かったら食べる？」

「ケーキ？」

「ケーキを知らないの！？ケーキはねえ甘くて美味しくてふわふわしてる素敵な食べ物なんだ。」

「本当！？でも私お兄ちゃんにお礼される様な事何もしてないよ。」

「気にしないで。困った時はお互い様だよ。」

「困った時は……お互い様。」

「そう。遠慮はなしだよ。それにケーキを知らないなんて人生の半分は損してるよ！」

「そうなの！？ケーキって凄いなだねお兄ちゃん！」

「その通りケーキは凄いだよ！えーっとそっいえば君の名前は？」

「私？私はマカロン！お兄ちゃんは？」

「ボクは悠華。橘悠華よろしくね。」

「うん。よろしくねお兄ちゃん！」

お兄ちゃんってというのは変わらないんだね。

「じゃあこっちについて来て！」

「うん！」

マカロンちゃんを凜々の中に案内して椅子に座ってもらった。

「ちよっと待ってね。初めてケーキをたべるならやっぱりこの子だよね。」

ボクがショーケースから取り出したのはショートケーキの一つ白いクリームがつつやと輝く子。

「…綺麗。これがケーキなお兄ちゃん？」

「うん。ショートケーキのしょーこちゃんだよ！はいフォークをどうぞ。」

「それじゃあ…。よっとはむっ…。」

フォークを手渡されたマカロンちゃんは直ぐ様ショートケーキを一口サイズに切って口に運びます。

「どづかな？口に合う？」

「……………」

「マカロンちゃん？」

口にケーキを運んでから黙りこんでしまったマカロンちゃん。もしかして美味しくなかったのかな？

「うっ…うっ…う。」

「うっ？」

「うまい！」

「本当？良かったー。」

「ケーキって美味しいんだね！感動した！」

目をキラキラと輝かせるマカロンちゃん。本当に感動してくれているみたいだ。素直な娘みたいだね。

「気に入ってもらって良かったよ。さあボクの事は気にせずに食べていいよ。」

「うんー！」

その言葉と同時にケーキを物凄い勢いで食べ始めるマカロンちゃん。あっという間になくなってしまっしょーこちゃん。

「美味しかったー!!」

「気に入ってもらって良かったよ。」

「ねえお兄ちゃん。あそこにあるのって全部ケーキだよな?」

「そうだけど、もしかして別のも食べてみたい?」

「お兄ちゃん私そんなに食いしん坊じゃないよ!そうじゃなくてこんなに美味しいケーキをたくさん持つてるお兄ちゃんはもしかして偉い人なの?」

「あはは。確かにケーキはたくさんあるけどボクは『悠華は銀河男の娘なすげえ奴なんだぜ!!』ちよつとミカエル!？」

「はえ、ねえお兄ちゃん今その首にかかっているから声がしたような気がするんだけど!」

「あ、ええとこれは、その…。」

ボクとマカロンちゃんの会話に突然乱入してきたミカエル。何がやりたいのであるうか?説明することこちらの身にもなってほしいよ。『何どもつてやがるシャキツとしろや。ちなみに俺は悠華の親父の大天使ミカエル様だ!!ほら凛々も何か言っつてやれ!』

《ニヤニヤー!!》

「今度は何なの!?猫、猫なの!？」

『あんまり悠華に馴れ馴れしくしないでだよ。魔族の嬢ちゃん!』

「ちよつと凛々まで何言っつてるの!?!ああ凛々っていうのはこの車

の名前でね。凜々は車だけど生きてるの!」

「くるま?よくわからないけど凄いなだね。」

「それで良いと思うよ。ところでマカロンちゃん魔族だったの?」

「あ、うん。そうだけとお兄ちゃんあんまり驚かないんだね?」

「喋るロザリオに喋る車が身近にいれば当然だよ。」

「何だかお兄ちゃんも大変そうだね。それにしても銀河男の娘かあ。何だか凄そうだね。」

「凄いのかな?」

『超絶凄いに決まってるだろうが!』

「ふ〜ん。でも私だって凄いなだからね。聞いて驚かないでよね。私は魔王なんだから!」

両手を腰にあてて胸をはるマカロンちゃん。見ていてとても微笑ましいと言っておきます

『な、魔王だと!?』

「魔王って魔族の王様って事?」

「そつだよ。でもまだ修行中なんだけどね。」

『てめえが魔王………………。』

「ミカエル？」

『だあつはははははははははははははははは！あり得ねえだろうがこんなチンチクリンが魔王だと！？最高だよあはははははははははははははははは！…ってあだ！？』

とりあえずミカエル（ロザリオ）を床に落とす。何故なら今のはミカエルが悪かったから。

「ごめんねマカロンちゃん。ミカエルがうざくて。」

「別にいいよ。私は偉大な魔王なんだからそんな事じゃあ怒らないもん。」

「そっかマカロンちゃんは偉いんだね。」

「えへへ。そうかなあー。」

『お世辞に決まってるだろうが！あどう！？』

ミカエルのあげた可笑しな声の理由？ごめんさすがに人、いや魔族？ああもうマカロンちゃんに失礼だったから踏みつけておきました。

「それで魔王のマカロンちゃんはどうして人間界にいるの？」

「それは勿論修行の為だよ！一人前の魔王になる為の。」

「そっかあ魔王も大変なんだね。」

「まあね。でもいつかは師匠みたいな立派な魔王になるんだ！まずはその為にもお仕事を見つけなくちゃ！」

「仕事？マカロンちゃんはバイトでもするの？」

「まあそんなところ。そんなわけで私はそろそろいくね。ケーキあげがとうねお兄ちゃん。」

「待ってマカロンちゃん！」

立ち上がって凜々を後にしようとするマカロンちゃんにボクは声を掛けてしまう。迷惑かもしれないけどあんな小さな女の子一人にバイトを紹介してくれるところなんてないかもしれない。だったら…。

「どうしたのお兄ちゃん？」

「マカロンちゃんは仕事の宛はあるの？」

「そ、それは…。」

「その、よかったら家のお菓子屋で働いてみない？」

『っておい！何もそこまでする事はねえがふっ！！』

とりあえずミカエルは黙っていてほしい。

「魔界から来たって事は住む家とかもないんだよね？ならここに住み込みで働いてみない？」

「でもそこまでしてもらおうわけにはいかないよ。だって私は…。」

「どうやらマカロンちゃんの意味は固いみたい。でも何故だかわからないけどマカロンちゃんの事は放っておけないんだよね。仕方ないこうなったらあれを使うしかないか…。」

「だめ…かな？」

「うつつ、わかったよ。だからそんな目で見つめないで！」「どうやら涙目と上目遣いのコンボ攻撃は魔王にも効果は絶大だったみたいだね。マカロンちゃん何故か顔を赤らめてピンクのクマのフードで顔を隠していました。」

「本当！？良かった！。」

『お前なあ魔族を雇うだなんて何考えてやがる？』

「魔族だとか関係ないよ。ボクはマカロンちゃんだから雇ったんだよ。」

いつの間にか首にかかっていたミカエルは呆れたように呟く。一体いつの間に？今度全力でミカエルを投げてみる事にしよう。

「私だから？」

「うんうん。確かまだベッドなんかも余ってたからそれを使ってもらうとしてと…。」

「お兄ちゃんって結構強引だね。」

『みてえだな。あんな悠華俺も初めて見たよ。お前の事を気に入ったんじゃないのか？』

「私の事をかあ。えへへ。」

「マカロンちゃんこれからよろしくね。頼りにしてるよ！」

「うん！この魔王マカロン様に任せてよ！」

新しくお菓子屋の店員となった魔族で魔王のマカロンちゃん。どうしてそこまでするのかと聞かれてしまうと正直ボクもよくわからないんだけど…。

強いていうなら放っておけなかった。まるで昔の自分を見ているみたいで。

もしかしたら魔王であるマカロンちゃんのカリスマに惹かれたのかもしれないね。悪い子ではないみたいだし。でも楽しくなるのは確実だと思う。

「ところでお菓子屋さんって何をするの？」  
まずはそこから教えなくちゃいけないのか…。

お菓子な男の娘と色欲の七大魔将と魔王（見習い）（後書き）

現在の悠華のアシストキャラ（今回の追加キャラのみ）

魔王（見習い）マカロン

バーンコメットスプラッシュ

色欲の七大魔将メルファス

紳士のたしなみ

相手のEXゲージを0にしつつダメージを与える。

とまあこんな感じでマカロンのバーンコメットスプラッシュは説明は不用ですよ。原作と効果は同じです。

話は変わりますが皆さんはくるくるのクリスマススイベント見ましたか？自分はアゼルと聖沙に色々と撃ち抜かれました。

お菓子な男の娘と寡黙な天使と魔剣（前書き）

みなさん遅くなりましたが今年も『お菓子な男の娘と星降る町』よろしく願います。

今回はまあいつも通りなんだけど展開が可笑的いのですがお許しく  
ださい。

## お菓子な男の娘と寡黙な天使と魔剣

悠華 side

「お兄ちゃんストロベリークレープ二つ注文入ったよ」

「任せて双子入りまーす。」

ボクはマカロンちゃんの指示を受けてストロベリークレープの双子を作りだす。クレープ生地でたっぷりのホイップクリームにストロベリーソースと苺を包んだ一品である。

ホイップクリームは冷蔵庫にて事前に冷やしてあるものを使うとかなり良いのです。

「できあがり。マカロンちゃんお願い。」

「任せて！ストロベリークレープ二つお待たせしました！ごゆっくりどうぞー！！」

「おお！これは結構レベル高いよー！！」

「そつつすね！でも食べてみないとわからないっすよ。」

マカロンちゃんがクレープ配膳したテーブルにはどこかの学校の制服をきた二人の少女がいました。ここ近くに学校でもあるのかな？

「ふっふっふ。はたしてこのクレープは私の舌を満足させる事ができるのかな？」

「や、やばいっすー！これ上手すぎるっすよー！」

「どれどれ。うつまーい！！これはスイーツ同好会始まって以来の大発見だよ！早速ナナちゃんに報告だよ！」

「待つてくださいつす！私はまだ食い足りないつす！」

「いいからいくの！お金はここに置いときますねー！！！」

スイーツ同好会？よくわからないけど女の子二人はお金を置いて帰ってしまいました。

「何なのあれ？」

「さあ？でもクレープを気に入ってくれたから良かったよ。」

「お兄ちゃんはお菓子が本当に好きなんだねえ。」

『全くだな。』

《ニヤニヤ。》

「ん？何か可笑しい？」

「お兄ちゃんはそので良いと思うよ。そんな事より今の二人で今日のお客さんは何人だっけ？」

「朝からで9人だよ。」

「なら今日はもうお客さんは来ないね。」

『まあそうだろうな…。』

《ニヤニヤ》

「どうせお客さん9人以上来たためしはないですよーだ。」

お菓子を販売してから3日経つんだけど1日のお客さんが10来たためしはないのです。しかもくるお客さんはほとんど同じという。マカロンちゃんにはこれで食べていけるのかと疑われた程である。

「拗ねないの、よしよし。」

『精進しろよ悠華!』

背伸びをしたマカロンちゃんに頭を撫でられながらミカエルの声援をボクは受けるのだけれどあまりうれしくないのは何故なのだろう？

「話は変わるけど私少し出かけてくるね!」

「何処に行くの?」

「魔王としての修行。何をするかはお兄ちゃんにも内緒。じゃあ行ってくるねー。サボったら駄目だよー!!」

「夕御飯までには帰って来てねー!」

『まったく嵐の様な奴だな。』

「魔王だから忙しいんだよ。さてともう一頑張りしますか。」  
あつという間に走り去っていったマカロンちゃん。魔王の修行、神秘的な物とかするのだろうか？  
まあ今はお菓子を売るのに専念するとしよう。

『しかしあのチンチクリンが魔王ねえ。魔力の貯蔵量だけなら下手したら悠華より弱いんじゃないのか？』

それから二時間経ったのだけれど…。

「予想はしてたけど本当にお客さんが来ない…。」

『まあ諦めろや。そろそろ店じまいしたらどうだ？』

「いやいやきつとボクのお菓子を待ち望んでいる人がいるはずだよ」  
「！」

諦めずにお客さんを待つボク。やっぱりチラシとか配ったり宣伝をした方が良さのだろうか？そんな事を考え思考の渦にボクが飛び込もうとしている時…。

「おい！」

「はい？」

「貴様これは何だ？」

いつの間にか現れた赤い髪を肩口まで伸ばした1人の少女。その少

女がショーケースの中にあつたお菓子の数々を無表情で指さしていた。

「あ、ええと。これってお菓子だけど？ケーキにクッキー。もしかして知らない？」

「聞いた事もないな。」

「ま、まさかお菓子を知らないなんてまさか君もしかして人間じゃないとか？」

マカロンちゃんしかりミカエルしかりゼウスさんしかりお菓子を知らない人は今のところ皆んな人間ではなかったけど。まさかこの娘も…。冗談半分でボクは呟くんだけれど。

「何故だ？何故私が天使だと気付いた？」

「え？まさか本当に？」

当たった。まさか本当に人間じゃないとは。家のお菓子屋のお客さんは魔族と天使しか来ないとか…。

それにしても確かに人間じゃないのか？とは聞いたのだけれど天使とは一言も言つてないんだけどなあ。

「答える。貴様は何者だ？」

少女の右手をこちらに向ける。そして言葉に徐々に感情が…。いや、これは霊力…。霊力が少女のこちらに向けられた右手に霊力が籠められている。もしかしてボク死んだ？

「はへ？」

身の危険を覚悟して身構えたボクだったけど突如首にかかっていたミカエル（ロザリオ）より霊力が放たれる。

「この霊力…。貴様同胞か。」

「あ、ええと。そのボクはただのお菓子屋だけで…。」

「隠さなくてもいい。私は同胞を貶めるような事はしない。それでお菓子とは何だ？」

ボクから正確にはミカエルから放たれた霊力。少女はどうやらボクを天使と間違えたようだ。これがミカエルの狙いなのだろうか？

「ちょっと待ってね。はい、これがお菓子。クッキーとケーキって言っただけだね。」

とりあえずボクは少女の疑問に答える為にお菓子をショーケースからいくつか取り出して見せる。

「何だ彫刻品か何かか？」

「ちょ、彫刻品？これは食べ物なんだけど。」

「食べ物だと？何故脆弱なる人間の真似をする？」

「でもご飯を食べないと生きていけないよ。」「必要な栄養ならこ

れで摂ればいい。」

「これは?」

「ヴァンダインゼリーだ。飲んでみる。」

「あ、ありがとう。ちゅー!」

少女よりもらったヴァンダインゼリーを吸ってみる。ドロツとした何とも言えない食感が口の中に広がる。味はマスカットのようである。

「どうだ?」

「あんまり美味しくない。」

「味覚など私達には不慣れた物だ。」

「うーん。ならお礼にこのケーキを食べてみてよ。」

「断る。」

「ボクだけもらってばかりだったら悪いからできれば食べてほしいな。」

「等価交換というわけか…。だがそれは穢らわしき魔族がする事だ。」

「天使はお礼を仇で返したりしないよね?」

「無駄だ。」

「そう言わないでフォークを使って「使えない。」仕方なかな。はい、あーん。」

ケーキを興味深そうに見つめる少女の口にボクは少し気恥ずかしさを感じながらも切り分けてフォークにさしたモンブランを運ぶ。

「はむっ……………!？」

「どうかな?」

「何だ、この舌を刺激する感覚は!？」

恐る恐ると言った感じでケーキを咀嚼する少女。飲み込むと目を見開き驚きの声をあげる。

「たぶんそれが美味しいって事じゃないかな?」

「美味しいだと?」

「はい、もう一口どうぞ。あーん。」

「はむっ。……………これが美味しいなのか。」

「そっだよ。どうかな?」

「もう一口寄越せ。」

「はい、あーん。」

しばらくこれが繰り返されました。

「美味しいか。悪くない。だがやはり無意味だ。」

「気に入ってもらって良かったよ。」

「勘違いするな。美味しいが気に入っただけだ。お前とお前の菓子を気に入ったわけではない。」

そう言うと椅子から立ち上がる少女。

「帰るの？いつでも歓迎するからまた食べにきてね。」

「…アゼルだ。」

「はへ？」

「私の名だ。」

「アゼルちゃんって言うんだ。ボクは悠華。よろしくね。」  
「…帰る。」

「行っちゃった。」  
名前を告げると何もなかったかのように歩き出すアゼルちゃん。なんとなくだけれどその顔はどことなく満足そうだった様な気がしました。

『無愛想な天使だったな。』

「そつかな面白い娘だったけど。」

『なんだああいうのが好みなのか？』

《ニヤニヤ！？》

「馬鹿言つてないで。さつき靈力出した事の説明を聞かせてもらおうかな？」

『ほう、気付いてたか。なら簡単な話だ。あの時点でああしてなければお前あの天使に殺されてたぜ。』

「そんな事はないと思うんだけどなあ。」

まあ確証とかもないんだけどアゼルちゃんはいろいろと知らないんだけどと思うんだよね。美味しいも知らなかったみたいだしね。誰かがそれを教えてあげればいいんだけど…。そんな事を考えていると…。

「…ただいまお兄ちゃん。」

「おかえりマカロンちゃん。ってどうしたのそんなにボロボロで！？」

ボクの目に映ったのはところどころがボロボロのマカロンちゃんでした。

「と、とりあえず傷の手当てをしないと！お店は今日は終わり！」

…傷の手当て中…

マカロンちゃんの話を纏めると魔族を苛めていた生徒会なる人達をこらしめようとしたら逆にやられてしまったらしい。

「怪我とかは大丈夫みたいだね。」

『にしても魔王のくせして人間に負けるなんてな。』

「だって5対1だったんだよ！」

「それは卑怯だねえ。それにしても生徒会という事はどこかの学校の生徒なのかな？」

「そんなの知らないよお。うつつ。」

「ごめんごめん。でもあんまり危ない事はしたら駄目だからね。」

「ならお兄ちゃんが一緒に戦ってくれるの？」

「あ、ええと。」

すっかり拗ねてしまったマカロンちゃんを前にどうしたものかとボクは首を捻る。

『よしなら特訓だ！ミカエル先生の青空教室その2の始まりだな。』

「はい？」

何やらミカエルにはこの状況を打開出来るようで…いやないのか？

『第2回となる今回は銀河男の娘の2つ目の武器エクスカリバーデユナミストだ。』

「なかなかカツコイイ剣だね。」

現在地はいつもの丘。そしてボクは背中に鞘に入った状態でベルトを通して背中に結びつけてあった剣を引き抜き上空に掲げて見つめる。

「でも私のアルザードの方がもつとかつこいいよ!」

対抗するかの様にアルザードを構えるマカロンちゃん。なかなか様になってるねえ。

『んな事はどうでもいいんだよ!その剣は魔力と霊力を籠めることによって力を発揮するわけなんだが。今の状態は霊力を籠めた状態だ。』

「ほうほう。」

『まずは魔力を籠めてみな。籠め方はライトシューターの時と一緒にだ。』

という事は自らの身体とデユナミストを行き来する血管を作って魔力を通すという事か…。よし!ボクは勢いよく魔力を籠めてみる。

「黒くなった。」

魔力が籠められたエクスカリバーデユナミストは禍々しい黒色へと

その身を変える。

『色だけじゃねえ。霊力や魔力を籠める事によってデュナミストは真価を発揮する。』

「そんな難しい話しはいいからさっさとかかって来てよお兄ちゃん！」

「ああうん。あ、白に戻った。じゃあ行くよマカロンちゃん！手加減してね？」

「ふっふっふ。残念だけど魔王はどんな相手にでも手を抜かないの！」

『言ってる。おい悠華、俺をデュナミストの柄に嵌め込んでみる。くぼみがあるだろうが？』

「本当だカチツと。それでこれにはどんな意味があるの？」

『いや何にもねえ。だが何かカツコイイだろうが？』

「最近ミカエルを見直してきたのに今のでどん底だよ。」

「もう！来ないならこっちから行くよ！」

「ちよ、ちよつと待ってよ！」

「もんどろむよー！！てりやー！！！」

『慌てるな。チンチクリンの手元を巻き込む様に剣の柄どうしを絡めて力任せに引っ張ってみる！』

「あれ？意外とと簡単に出来た？」

ミカエルの指示が耳に入った瞬間言われた通りに身体が動く。そしてマカロンちゃんの手よりとばされるアルザード。

『お前はゼウスから人間離れした身体能力をもらっているんだ。無論目の良さもな。あれくらいの芸当出来て当たり前。出来ない方が可笑しいってもんだ。』

「言われてみると確かにそこまで難しくはなかった様な。」  
等とデュナミストに付いたミカエルと会話をしていると吹き飛ばされたアルザードに近寄っていたマカロンちゃんの様子が可笑しい事にボクは気付く。

「あー！アルザードが！抜けないよー！！」

刀身の半分程まで地面に突き刺さったアルザード。どうやらあれを引き抜こうとしていたみたいだ。

「これはまた見事に突き刺さっているね。」

「いやー！抜いてよー！！」

「わかった、任せてよ。せえーの！…駄目だビクともしない。」

「そんなの知らないよー！早くしてよー！！」

地団駄を踏みだすマカロンちゃん。どうしたのだろうか？なんだか様子がおかしいかな？とりあえず全力で引っ張ってみよう。

「どおーりゃー！…」

『これは無理だろう諦めな。』

「やだやだやだー！！うわぁーん！！」

地面に寝転んでジタバタし始めたマカロンちゃん。なんだか幼児退行でもしたかのようである。

「マカロンちゃんそんなに地面で寝転んだら汚れちゃうから。そうだこのデユナミストあげるから。」

「アルザードがいいのー！」

デユナミストを差し出してみても泣き止まない。まあ当たり前か…。なら最後の手段。これで泣き止まなかった子供はいない…。

「じゃあケーキ好きなだけ食べていいから。」

「本当？」

「本当本当。マカロンちゃんがケーキを食べてる間にアルザードの方は何とかしておくからね。」

「うん、わかった！」

「やはりお菓子の力は偉大だね。駄々っ子かのように泣いていたマカロンちゃんがぴたりと泣き止んだよ。」

『それはいいがどうやってこれを引き抜くきだ？』

「え？ミカエルなんとか出来ないの？」

『知るかよ。デユナミストで掘ればいいんじゃないか？』

「いやいや何日かかるかわからないよ。」

『んじゃあ、諦める。』

「そついうわけにもいかなでしょう。よいしょよいしょ。」

『本当に掘るのかよ！？しゃあねえなあ、デユナミストに靈力を籠めて地面を掘ってみろや。』

「最初から方法があるなら教えてよ。靈力を籠めてと……。えいやっ！！」

靈力を籠めたからって本当に掘れるのであるか怪しいものである。とりあえずやってみますか。その結果……………。

「じ、地面が抉れた。」

『靈力によって強度なんかも上がってるからな。ほらちゃっちやと掘りやがれ！』

「はい。よいしょ！これアルザードごと吹き飛ばしたりしないよね？」

『そこは靈力の加減を調節しながらやれや。力になれる為の修行が思わぬところできたな。』

「よいしょー！よいしょー！……」

その後意外と簡単にアルザードを掘り起こす事に成功したんだけど…。

「ケーキも美味しいけどアイスも美味しいんだねお兄ちゃん。」

「ブギボー。」

凛々の中でケーキを食べていたマカロンちゃんにアルザードを届けただけとそこで待っていたのは仲良くシヨーケースの中のケーキを食らいつくし冷蔵庫に入れたアイスにまで手を出していたマカロンちゃんとブギウギでした。

「これは予想外かな？」

「ドンマイだな。」

その後ボクがケーキをひたすら焼き続ける事になったのは言うまでもないはずだ。

**お菓子な男の娘と寡黙な天使と魔剣（後書き）**

悠華の現在の實力はマカロンより上メリロットより下というわけです。

あれ、幅が広い？

アシストキャラはこれ以降増えた時のみに行う事にしました。それでは次回もお楽しみに。

お菓子な男の娘と生徒会とその他大勢の皆さん（前書き）

随分と遅くなりましたがこの駄目クオリティ申し訳ありません。  
大変見苦しい物ですが見てくださるとありがたいです。

（誤字報告あったので修正しました。）

## お菓子な男の娘と生徒会とその他大勢の皆さん

聖沙 side

「悠華さん貴女は今何処にいるのかしら？」

先日出会った私の王子様（聖沙の妄想）の橘悠華さん。ガラスの靴（お菓子のレシピが書いてあるメモ帳）を拾ったのは良いのだけれどその後一向に出会う事ができずに現在に至る始末。その想いは日時が経つほどつり生徒会の業務にまで支障をきたしていたわ。いけないのはわかつているわ。でも悠華さんのあの痴漢を撃退する勇敢で華麗な姿が頭の中から離れないのよ。

「はあ、貴女にもう一度会いたいわ悠華さん。」

「おーい、なに暗い顔してんのよ副会長。」

「ナナカさん役職で呼ばないでちょうだい！」

生徒会会計の夕霧ナナカさん。スイーツ同好会っていうよく分からない同好会を設立させているわ。明らかにこちらを馬鹿にしているわね。

「なんでい、いつものミサじゃん。」

「もうなんなのよ一体。」

私は悠華さんの事を考えていただけ。特に可笑しな点はなかったは

ずよね。

「ミサどうかしたの？何かあったなら生徒会長の僕に相談してみよ。」

「結構よ。私の海よりも深い想いは咲良君なんかには理解できないでしょうね。」

生徒会唯一の男、生徒会長咲良シン。私にとってのつくきライバル。こちらを心配そうに伺ってはいるけど心の中では一体何を考えているのかわかったものじゃないわ。

「バツサリだなシン様。」

「キラキラな学園生活に障害はつきものだよパッキー。」

あの新種のブラックマはパッキーさん。とても可愛いけど口が悪いのがちよつと残念だわ。

「これを言語道断と言っんですね。」

この娘は私の一つ下の後輩ロロット・ローゼンクロイツさん。本人は隠しているみたいだけど天使みたいよ。相変わらずよくわからないわね。

「ちよつと違うかな？でもミサちゃん本当にどうかしたの？」

この素敵な人は元生徒会長、現在相談役の九浄リア先輩。私の憧れ

であり敬愛するお姉様。でも今ならわかるわ、それがあくまで憧れであった事が…。今の私の心を支配しているのはあの人。

「いいえ、お姉様のお手を煩わせるほどの事はありません。ああ貴女は今何処にいるの!？」

「な、ならいいんだけど。」

「ヒスの奴重症だな。」

「ガイドブックに書いてありました。これが恋はモウモウ牛さんですぬ。」

「恋は盲目の事なのかなロロツトちゃん？」

どことなく突っ込まないといけない様な発言があった様な気がしたのだけど私は最早我慢の限界だったわ。

「はあ、これが一目惚れなのね。きっと神様が私達を運命の名の元に巡り合わせ障害を与えられたのね。ならこうしてはいられないわ。悠華さん今貴女元に会いに行くわ!」

自分に与えられた仕事は終わらせたわ。なら私には最早ここに縛りつけられる理由もないわ。

悠華さん待っていて!今貴女の聖沙が会いに行くわ!!

生徒会 s i d e

生徒会のメンバーは急に生徒会室を飛び出していった聖沙の不可解

な行動に頭を捻らせていた。

「み、聖沙ちゃん急にどうしたんだらう?」

「お腹でも空いていたんじゃないんでしょうか?」

「いやそんな口口ちゃんじゃないんだから。」

「私そんなにいやしんぼじゃありません!」

「おい天使羽がでてるぞ。」

「あわあわ。私は天使じゃありません!」

パッキーの指摘に羽を収める口口ト。彼女が天使だという事は生徒会の中では周知されているのである。生徒会のメンバーは特に驚いた様子もなく聖沙の不可解な行動の理由を考えていた。

「わかった、わかったよ聖沙が急に出て行った理由が。」

「シン言っておくけどトイレじゃないからね。」

「……え。」

「図星かよ。」

「まあそんなに気にする様な事でもないんじゃないの?それよりさっちゃんが美味しいお菓子屋さんを見つけたんだって。みんなで行っ

てみない？」

「僕お金持ってないよ。」

「いやいやシンにお金出させようと思う程私も馬鹿じゃないよ。」

「私お菓子は大好きです」

「俺様甘ったるいのはあんまり……。」

「ならパンダさんはお留守番ですね。」

「お菓子屋さんって事はシヨコラの事かな？」

「さっちんの話だと新しくオープンしたお店でお値段お手頃で学生の懐に優しいそうですよ。リア先輩も行ってみませんか？」

「そうだね生徒会の仕事も殆ど終わってるからいいんじゃないかな？私賛成だよ。」

「リアちゃんが行くなら俺様も行くぜ！」

「変わり身早いねパツキー。」

「リアちゃんが行くところ俺様ありだぜ！それよりシン様早く準備しろよ！」

「わかったからちょっと待って！」

生徒会メンバーが向かうのは言わずと知れた悠華のお菓子屋さん。何かお菓子な事が起きるのは確実であろう。

「美しい花ばなに囲まれて飲む紅茶も悪くないものですね。」

優雅かどうかは分からないけど紅茶をたしなむメルファスさん。まあ本人が優雅と言うのだからそうなのだろう。ちなみにメルファスさん紅茶一杯で二時間粘っている。

「私に近づかないでくださいねメルファス。それにしても悠華さんまた紅茶の淹れ方が上手くなりましたね。指導した者として誇らしいですよ。」

「あ、ありがとうございますメリロットさん。」  
今紅茶を褒めてくれた彼女はメリロットさん。アゼルちゃんが連れてきたと言えいいのかついで来た方が正しいのかもしれない。メリロットさんはアゼルちゃんの保護者的な立場らしい。初めて来た時からボクに紅茶淹れ方を指導してくれる。ある意味先生と言っても過言でもないのかもしれない。ちなみにメルファスさんの知り合いのようである。メリロットさんはあまり良い顔はしないのだけだ。まあなんとなくわかる気もしいではないんだけどね。

「おい悠華早く次のお菓子を出せ。」

「もう食べたのアゼルちゃん!？」

「問題はない。早く次を寄越せ。」

実はアゼルちゃん出会ったあの日から毎日の様にお菓子を食べにく

るのである。ちなみにお菓子を販売する場所は定期的に変えているのだけれどアゼルちゃんはいつも難なく見つけ出してお菓子を食べるのである。しかもかなりの量を。今日は公園の近くに陣取っているのであるがアゼルちゃんはメリロットさんと共に訪れたのである。アゼルちゃん曰く『悠華はもう私から逃げられない諦める。』との事である。

「ならフルーツタルトを。」

「おや美味しそうですね。私にもいただけますか？」

「はい少々お待ちください。」

アゼルちゃんの要望により新たにフルーツタルトのタルタル君を取り出して切り分ける。

「悠華さん私には貴女のスマイルを一ついただけますか？」

「はいメルファスさん！」

「疲れた身体に染み渡りますね。」

メルファスさんに今出せる最高の笑顔を出しながらフルーツタルトを食器に乗せ変えてメリロットさんとアゼルちゃんにさしだす。ちなみにスマイルは0円である。まさか頼む人がいるとは思わなかったのだけれど。

「それとツケを早く払ってくださいね。結構貯まってきましたよ。」

無銭飲食は犯罪ですよ。

「よろしくお願ひします。」

キザッぱい流し目でメリロットさんを見つめるメルファスさん。

「何故私を見るのですか？」

それを嫌悪感丸出しで睨み付けるメリロットさん。なんと対極的な二人であるうか。

「私と貴女の中ではないですか？」

「貴方と関係を持った覚えはありませんが。」

「全く貴女はつれませんねえ。だけどまたそれがいい。」

「気安く触れないください。セクハラですよ。」

「ぐはうっ！？けど今の私には悠華さんのスマイルがあるのです。悠華さんスマイルをください！」

「は、はいスマイルです！」

メリロットさんの見えるパンチがメルファスさんの鳩尾に決まるのを少し引きながらひきつったスマイルをメルファスさんに。

「痛みが消え去ります。悠華さんは戦場の中の女神ですね。」

ボクは男なんだけどなあ。

「あ、ありがとうございます。」

「悠華さん貴女は誰にでも優しくすぎます。迷惑な客にはしっかりと迷惑だと言わないといけませんよ。」

「でもケーキを美味しいと言ってくれますから。ケーキを美味しいって言うってくれる人に悪い人はいませんよ。」

「はあ、貴女も以外と強情ですね。」

「そこが悠華さんの良いところですよ。では私は失礼します。また会いましょう美しい花々達。」

薔薇の花びらを巻き散らして去っていくメルファスさん…。

「メルファスさんまたお金を払わずに行っちゃった。」

「またその内現れるでしょう。では私達もそろそろ失礼しますね。行きますよアゼル。」

「ま、待て！まだこのフルーツタルトを食べ終わっていない。」

「貴女それを全部食べるつもりですか？」

「当たり前だ。」

「アゼルちゃん包んでおくからお家に帰ってから食べたなら？メリロットさん忙しいみたいだし。」

「ならその茶色のケーキもだ。」

アゼルちゃんが指をさしたのはチョコレートケーキのれーちゃん。

「チョコレートケーキだね。ちょっと待ってね。」

「切らなくていい。そのまま入れろ。」

「アゼル貴女お金を払うのは誰だかわかっていますか？」

「お前だろう？何をわけのわからないことを言っている。」

「あはは、できました。はい、どうぞ。」

れーちゃん（チョコレートケーキ）を紙箱に入れてアゼルちゃんに手渡す。

「ご苦労。」

「貴女は何故そんなに偉そうなんですか？ではお会計を………これはいくらなんでも安すぎないですか？」

「気にしないでください。ボクの住んでたところではこれくらいの値段が普通でしたから。」

メリロットさんの反応は正しいと思う。れーちゃんの大きさは5号。大抵のチョコレートケーキは3000円はくだらない。だけど提示した価格は1000円。まあ実際はれーちゃんを作る為に使用した材料はつくも神の車である凜々から無料で手に入れたとは言えない。

「そうですか。ならいいのですが…。」  
「おい、何をしている？私は先に戻るぞ。」

ケーキを持ったアゼルちゃんはメリロットさんにひと声掛けると直ぐに歩き出してしまふ。もしかしてケーキを気に入ってくれたのだろうか？

「あの娘はまったく仕方ありませんね。悠華さん今日はこれで失礼しますね。」

「はい、またのご来店お待ちしております。これさっきのフルーツタルトの余りです。サービスなのでお金はいりません。また紅茶のご指導よろしくお願いしますメリロットさん。」

こんな感じで今日の九人目のお客様は帰って行く。

「ノルマクリアまで後一人。九人の壁はやっぱり大きいね。だけどボクは諦めない。何故なら諦めたらそこで終わりだから！よし気合を入れよう！」

本来ならお客なんてこれ以上来ないのだが今回は悠華が気合いを入れたせいか、もしくは今まで悠華が気づかないで立ててきたフラグのせいかは知らないが…。  
少し可笑しいやお菓子な事が起ころうとしていた。

マカロン side

魔族で魔王（見習い）の少女マカロンは生徒会との闘いで敗北して

考えた。

何故負けたのかと。そして答えを出した。数が少なかったと。そして結成したワルセイダースを。

そして今マカロン率いるワルセイダースは……………。

「じゃあ今からみんなでお菓子を食べに行こう!」

「お菓子?それって美味しいの?」

団員その1魔界のアイドルのサリーちゃん。

「牛丼よりうまいのか?」

団員その2暴食の七大魔将オデローク。

「牛丼?それが何かは知らないけどお菓子はとっても美味しいよ!ふわふわして甘いんだよ!」

「ぶぎぶぎ(うんうん)」。

団員その3魔族のブギウギ。

「お兄ちゃんのお菓子はとっても美味しいから楽しみにしててね。」

「隊長、おでたくさん食べる。」

「あたしも ！！」

「うーん。この間食べすぎてお兄ちゃんが拗ねちゃったからなあ。」

「おで仕事てつだう。」

「あたしも ！！」

「なら大丈夫かな？あんまりお兄ちゃんの悲しい顔は見たくないからなあ。」

「ブギボー（お腹空いたから早くいこうよ）。」

「そうだね。よしワルセイダース出発！！」

既に生徒会が向かっている悠華のお菓子屋にマカロン率いるワルセイダースも向かう。最早嫌な予感しかしないであろう。

そしてその頃一応この小説のメインヒロインの一人である彼女は…。

聖沙 side

「また出会う事が出来るとはやはり運命なのですね。私達が巡り合う事は。」

「どうして貴方なのよ！？私が会いたいのには悠華さんよ！！」

シン達と共に行動していたら悠華に簡単に出会えただろうにまたもや痴漢もといメルファスと遭遇していた。  
ツンデレツインテールの旅はまだまだ続く。

お菓子な男の娘と生徒会とその他大勢の皆さん（後書き）

悠華のお菓子屋（名前未定）

現在販売されているお菓子で判明している物。

- ・チーズケーキ
- ・ストロベリークレープ
- ・チョコレートケーキ
- ・フルーツタルト
- ・シヨートケーキ

現在料金を払ってくれる人物がメリロツトのみという事実。 それ  
と更新が遅くなってしまつて申し訳ありません。

最近色々忙しい為に二週間に一度の更新になるかもしれませんが  
ご容赦ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7447y/>

---

お菓子な男の娘と星降る町

2012年1月15日00時53分発行